

令和5年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業

変化していく高齢者像を見据えた地域住民が支え合う
地域づくり推進のための生活支援コーディネーターに
求められる機能に関する調査研究

報告書

令和6年（2024年）3月

特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター

**「変化していく高齢者像を見据えた地域住民が支え合う地域づくり推進の
ための生活支援コーディネーターに求められる機能に関する調査研究事業」
報告書**

目次

第1章 事業概要	2
1. 研究目的	2
2. 事業実施概要	3
1) 研究委員会の設置・開催	
2) 特定地域を抽出した地域住民意識調査（フィールド・ヒアリング調査）	
3) オンラインフォーラムの開催	
4) 報告書の作成	
第2章 地域住民ヒアリング調査結果	7
・調査概要	
・調査結果概要	
・ヒアリング調査結果の概要	
・現役世代の地域活動意識等（ヒアリングから）	
第3章 『そろそろ2040年の話をしようか？』オンラインフォーラム開催	21
・フォーラム概要	
・プログラム	
・企画背景となる問題意識	
・プログラム意図	
・参加者からの評価	
第4章 事業の総括	34
1. 事業背景となる問題意識	
2. 住民意識ヒアリング調査	
3. 委員会の議論からフォーラムへ	
4. 地域の持続可能性を見据える生活支援コーディネーターの視点	
参考資料	
● ヒアリング回答例.....	40
● フォーラム告知チラシ.....	48
● フォーラム当日資料.....	50

第 1 章

事業概要

1. 研究目的

少子高齢化・人口減少社会を背景に、わが国の生産年齢人口は減少を続ける一方、後期高齢者は増加し、必然的に福祉・介護における専門職人材のひっ迫は、喫緊の課題となっている。

専門職サービスに対する過度な依存を避け、地域における生活支援・介護予防の維持・充実をはかってゆくためには、地域住民を含めた多様な主体が地域づくりの担い手として地域包括ケアシステムの構築に参画していくことが不可欠であり、その活動をコーディネートする生活支援体制整備事業を地域の中で適切にワークさせていくことが重要となる。

他方、これまで地域を支える互助活動の主体であり、生活支援コーディネーターが主に関わってきた自治会等の地縁組織では高齢化の進展に伴う後継者不足が課題となっている。このことは地域の高齢者人口の減少・高齢者に占める後期高齢者の割合の増加など人口動態に起因するほか、団塊の世代が後期高齢者となっていく中で、地縁組織に依存しない高齢者や地域活動に関心のない・接点のない層が増加しつつあることもその要因と考えられ、これまでのように地縁組織＝地域の高齢者として一括りにできない地域が今後増加していくことが見込まれる。

このような状況を踏まえると、多様な価値観をもつ高齢者、さらには若年層も含めた地域住民を地域づくり活動に巻き込み、あるいは相互に活動を活性化させながら、地域全体で高齢者の社会参加を進めていくという視点は2025年以降の生活支援コーディネーターの活動において欠かせないものとなると考えられる。

そこで、本研究においては、地域住民の地域や地域活動等に対する意識を把握するため、モデル的に数地区を抽出し、フィールドとして設定。フィールド内の現役世代を中心としたさまざまな属性の住民に対して広範なヒアリング調査を実施した。また、多様な世代で地域づくりを行っているRMO関係者、研究委員会メンバー、厚生労働省担当者等を交え、多様な価値観・世代の住民による地域活動について考えるフォーラムを開催し、今後の地域活動を展開・支援を行っていくにあたっての課題や、生活支援コーディネーターに求められる機能等についての意見を交換、これらを本書にとりまとめた。

2. 事業実施概要

1) 研究委員会の設置・開催

本研究事業実施にあたり、本件テーマに知見を持つ学識経験者、支援現場実践者、行政職員等を中心とした研究委員会を設置・開催した。委員長と当法人理事長以外は、厚生労働省担当者と協議のうえ、現役世代（65歳未満）の委員で組織した。

【委員構成】

委員長：高橋 誠一	東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授
委員：柴田 学	関西学院大学 人間福祉部 准教授
倉嶋 香菜子	株式会社 ママのHOTステーション 代表取締役
菅沼 裕子	栃木市社会福祉協議会 地域福祉課
中村 雄介	NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝
岩城 和志	淡路市社会福祉協議会 事務局次長
津波古 加津代	北谷町役場 福祉課
池田 昌弘	全国コミュニティライフサポートセンター 理事長
〈オブザーバー〉	
岸 英二	厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進室 室長補佐
石松 香絵	厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進局 係長
長谷川 瑛梨	厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進局

【開催日程】

◆第1回委員会

開催日：2023年11月2日（木）

会場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員7人、オブザーバー2人、事務局2人

議事：研究事業に関する概要説明

委員報告（淡路市社協・岩城委員）

フィールド・ヒアリング調査について

意見交換 他

◆第2回委員会

開催日：2023年12月22日（金）

会場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員 7 人、オブザーバー 3 人、事務局 3 人

議 事：ヒアリング調査進捗報告

委員報告（ママのH0Tステーション・倉嶋委員、暮らしづくりネットワーク北芝・中村委員）

フィールド・ヒアリング調査について

2月開催フォーラムについて

意見交換 他

◆第3回委員会

開催日：2024年1月23日（火）

会 場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員 6 人、オブザーバー 3 人、事務局 3 人

議 事：ヒアリング調査中間報告

2月開催フォーラム「そろそろ2040年の話をしようか？」について

意見交換 他

◆第4回委員会

開催日：2024年3月7日（木）

会 場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員 7 人、オブザーバー 2 人、事務局 3 人

議 事：2. 2 2フォーラム報告

ヒアリング調査報告

意見交換 他

2）特定地域を抽出した地域住民意識調査（フィールド・ヒアリング調査）

○特定地域をフィールドとして抽出し、そのエリアにおける現役世代を中心としたさまざまな地域住民に対してのヒアリング調査を実施した。

○住んでいる地域に対する意識・愛着、普段の近隣の人との支え合い・交流等の有無、地域活動（地域の自治会活動、地域内での特定目的・アソシエーション型活動）に対する参加経験・意向・考え方等のヒアリングを行った。

○①都市部地域、②近郊・中都市地域、③中山間地域の各地域から、最低1地区以上、合計で4地区（フィールド）を抽出した。

※実際には、①1地区（中部A市）、②2地区（関東B市、関西C市）、③1地区（四

国D町)を選出。

○候補として選定した対象自治体に対し協力を要請、了承を得た後、該当自治体と協議のうえ、対象地区（小学校区～中学校区程度）を決定した。

○本調査は定性調査であるが、標本誤差の考え方を考慮し、各地区50サンプル以上（誤差15%）をヒアリング目標とした。

○各地区の地縁組織や志縁組織の関係者のほか、それらの人からの紹介（機縁法）を受けながら、さまざまな年代や地域活動に携わっていない人も含めた広範な地域住民からのヒアリングを実施した。また、状況によっては、何らかの会合やサロンなどの場をお借りしたグループインタビュー形式のヒアリングも行った。

○各フィールドは固定した担当者を中心にヒアリングを進めた。事業進行による該当地区とのラポール形成により、通常接触しにくい対象者（地域活動に携わっていない人、仕事を持っている若い世代等）までリーチすることを意図した。

○調査期間 2023年11月～2024年3月

※実際の地域住民への面接ヒアリングは、2023年12月～

○回収サンプル数（有効回収数：調査後に対象外と判明した除外サンプルを除く）

A市46、B市50、C市50、D町52

計198サンプル

○調査結果は第2章参照

3) オンラインフォーラムの開催

○多世代・多様な視点から地域の協働を考えるフォーラムを開催し、本委員会委員とゲストによる講演とセッションを行い、今後の多様な価値観・世代により地域活動を展開・支援を行っていくにあたっての課題を考えた。

【フォーラム概要】

開催日：2024年2月22日（木）13：30～16：30

会 場：Zoomウェビナー活用によるオンライン開催

参加者：（登壇者）委員長、委員7名、ゲスト1名

参加アカウントは約260、実視聴人数は推定300人超。

（事前申込から1アカウント複数人視聴を計算）

題 目：「そろそろ2040年の話をしようか？」

～多世代での協働と持続可能な地域の姿とは～

◆基調講演『未来（2040年）に向けて』

・東北福祉大学 総合マネジメント学部教授 高橋 誠一 氏

◆セッション1『未来（2040年）に向けて～若い世代への支援・多世代交流』

- ・株式会社 ママのHOTステーション 代表取締役 倉嶋 香菜子 氏
- ・NPO法人 きらりよしじまネットワーク 事務局長 高橋 由和 氏
- ◆セッション2 『未来に向けた私の提言～自分の地域を考えた～』
- ・淡路市社会福祉協議会 事務局次長 岩城 和志 氏
- ・NPO法人 きらりよしじまネットワーク 事務局長 高橋 由和 氏
- 〔コメンテーター〕

- ・厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進室
室長補佐 岸 英二 氏
- ・関西学院大学 人間福祉学部 准教授 柴田 学 氏
- ・栃木市社会福祉協議会 地域福祉課 菅沼 裕子 氏
- ・NPO法人くらしづくりネットワーク北芝 中村 雄介 氏
- ・北谷町役場 福祉課 津波古 加津代 氏
- ・全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

- 本事業の報告も兼ね、多くの価値観を持つ多世代の住民により、今後の地域活動をどう行っていけばよいかを考えるフォーラムを開催した。
- 多世代協働による地域づくりをすすめるRMO関係者と、研究委員会メンバー、厚生労働省担当者等を含めた意見交換など。
- フォーラム内容詳細については、委員会の討議を経て決定した。
- 対象としては、市町村の生活支援体制整備担当者及び生活支援コーディネーター、地域福祉関係者を想定
- 広報は、市町村宛てDM送付のほか、当法人HPでの告知による。
- 参加者からは、非常に高い評価を得た（5点満点で平均評点4.6）
- 詳細は第3章参照

4) 報告書の作成

- 上記調査結果や委員会、フォーラム等での検討を踏まえ、今後の地域活動を展開・支援を行っていくにあたっての課題や、生活支援コーディネーターに求められる機能等について、考察を報告書にとりまとめた。
- 作成した報告書を全国都道府県、市区町村に送付するとともに、PDF化し、ホームページにアップロードした。

第 2 章

地域住民ヒアリング調査結果

生活支援体制整備事業における今後の高齢者像の考察に供するため、未来の高齢者である現役世代を中心とした地域住民の地域や地域活動に対する意識を把握するためのヒアリング調査を実施した。全国からモデル的に 4 地区を抽出しフィールドとして設定、さまざまな年代の方を対象として行い、結果を研究委員会に供した。

以下に、本件調査概要を記す。

【 調査概要 】

○調査名 地域住民意識調査（フィールドヒアリング調査）

○調査対象地区 全国から 4 地区をフィールドとして抽出・設定

①都市部、②近郊・中都市部、③中山間地域から各 1 地区以上計 4 地区として想定。候補を事務局と厚生労働省担当課と協議・作成後、委員会での了承で決定。

① 都市部：中部 A 市

② 近郊・中都市部：関東 B 市、関西 C 市

③ 中山間部：四国 D 町

以上の 4 自治体担当部署（生活支援体制整備担当）に了解を得た後、調査対象地区（日常生活圏域：中学校区～小学校区）を協議により決定。

○調査対象 対象地区内の若年～壮年層（現役世代：未来の高齢者層）

40～50 代（団塊ジュニア世代）を中心として、中学生～64 歳までを対象とした。

○調査方法 フィールド・ヒアリング調査（訪問面接ヒアリング）

地縁組織、志縁組織（アソシエーション型組織）等から始まる機縁法

※このため、対象地区での協力を事前に取り付けている。

○調査対象数 目標を各地区 50 人以上 計 200 人とした。

本調査は定性調査であるが、標本誤差の考え方を考慮し、各地区 50 サ

ンプル（標本誤差 15%）以上と設定

実際の回収サンプル数は、A 地区・46、B 地区・50、C 地区・50、D 地区 52 の計 198 s

※数値は有効サンプル数。調査後に対象外と判明し除外したサンプルを除く

○調査期間 2023 年 11 月～2024 年 3 月

○ヒアリング内容

原案を事務局と厚生労働省担当課で協議・作成後、委員会での討議、修正の上で決定。

実際には、下記設問の回答内容により、適宜プルービング（深堀り）質問を実施。半構造化手法。

属性 1．年代（10 代きざみ）

属性 2．性別

属性 3．地域の居住歴（概数）

問 1．今後もこの地域に住み続けたいと思っているか 【居住・永住意向】

問 2．近隣の人との交流の程度 【近隣関係・支え合いの有無】

問 3．地縁組織・活動に参加したことがあるか 【地域活動参加経験等】

問 4．特定目的の活動（スポーツ・趣味・ボランティアなどアソシエーション型活動）に参加したことがあるか 【志縁活動参加経験等】

問 5．自分が 70～80 歳になったとき、どんな生活を送っているか【高齢時生活像】

問 6．（自分が高齢時）体が弱ってきた、人の手助けが必要になったらどうするか。
【生活支援・介護に対する意向】

問 7．（自分が高齢時）どんな地域であったら良いと思うか 【理想の地域像】

問 7-1．その地域はどうすれば実現可能だと思うか 【理想実現方法】

問 7-2．そのような地域の実現に向けて、自分が動こうと思うか 【活動意思】

【 調査結果概要 】

○調査対象者属性

	関東 B市	中部 A市	関西 C市	四国 D町	計	
計	50	46	50	52	198	
10代	2	4	0	1	7	3.5%
20代	7	2	0	6	15	7.6%
30代	8	6	9	11	34	17.2%
40代	14	11	28	20	73	36.9%
50代	17	20	12	12	61	30.8%
60代前	2	3	1	2	8	4.0%
女性	29	27	28	27	111	56.1%
男性	21	19	22	25	87	43.9%
(居住) 10年以下	5	7	21	20	53	26.8%
20年以下	11	11	19	5	46	23.2%
21年以上	34	28	10	27	99	50.0%

○調査対象地区の特徴

今回調査において、各自治体の中でほぼ日常生活圏域（中学校区～小学校区）にあたる特定地域を、自治体と協議のうえ、調査対象フィールドとして設定した。各地区の特徴を参考のため簡単に記す。（文責は、事務局）

中部 A 市：中核市。対象地区は、元農村近郊集落で住宅化が進行。地縁が残り、多世代居住も少なくない。車での便は良いが公共交通機関が弱い。

関東 B 市：大手企業が立地。対象地区は、中心商店街が所在し、駅も近く利便性が高い。商店街ならではの旧来のつながりも残る。

関西 C 市：丘陵地にひらかれた近郊住宅地で自然も残る。地区内の小学校は著名で、教育熱心な親も多い。坂がきつく、徒歩は大変。

四国 D 町：町の中心部。駅、役場、商店が近く、利便性が高い。共同住宅（マンション・アパート）もあり、他地区からの移住者も多い。

○各設問回答

本調査で実施したヒアリングの結果を、設問毎に回答趣旨の近いものをグルーピング、分類・数値化を行った（テキスト分析）。この際、設問に対し複数の回答があった場合は、中心的と考えられる回答に絞りこみ、また、ほぼ並列と考えられる（複数）回答の場合は、先に言及した回答を優先している。この結果数表を以下に示す。

なお、各分類項目での具体的な回答例（対象者の実際の発言）は、参考資料 40 頁以降を参照。

		関東 B市	中部 A市	関西 C市	四国 D町	計	
Q1	定住意向	36	38	39	37	150	75.8%
地域定住意向	非定住意向	4	4	6	4	18	9.1%
	他(こだわらない等)	10	4	5	11	30	15.2%
Q2	ない	0	2	2	0	4	2.0%
近隣付き合い	挨拶程度	12	24	16	8	60	30.3%
	立ち話	14	6	19	13	52	26.3%
	それ以上	24	14	13	31	82	41.4%
Q3	参加	26	16	26	16	84	42.4%
地縁活動	義務的参加	23	27	17	28	95	48.0%
	経験なし	1	3	7	8	19	9.6%
Q4	参加継続	20	20	18	19	77	38.9%
志縁活動	過去参加	9	7	3	8	27	13.6%
	経験なし	21	19	29	25	94	47.5%
Q5	具体的活動	9	1	7	6	23	11.6%
高齢時生活像	家族・友人と	10	8	11	9	38	19.2%
	元気・健康	7	8	10	7	32	16.2%
	余裕・のんびり・趣味	6	17	9	14	46	23.2%
	働きたい	10	3	5	11	29	14.6%
	施設	1	2	0	0	3	1.5%
	利便性の高い地域	1	2	5	4	12	6.1%
	ほか	5	3	2	1	11	5.6%
	思いつかない	1	2	2	0	5	2.5%
Q6	家族(配偶者、子)に	16	11	8	18	53	26.8%
体弱ったとき	家族＋地域・友人	9	1	0	1	11	5.6%
	家族＋サービス	5	3	5	6	19	9.6%
	サービス	10	6	22	14	52	26.3%
	施設	4	18	9	4	35	17.7%
	行政・包括に相談	0	1	1	5	7	3.5%
	家でくらしたい	4	1	1	2	8	4.0%
	その他	2	5	4	2	13	6.6%

		関東 B市	中部 A市	関西 C市	四国 D町	計	
Q7 理想地域像	地域・友達と、コミュニケーション	17	9	21	8	55	27.8%
	子ども・高齢者・障害者に優しい	3	2	4	3	12	6.1%
	居場所がある	3	3	0	6	12	6.1%
	交通の便、交通支援	8	15	4	14	41	20.7%
	買物・病院・生活インフラ	10	10	5	6	31	15.7%
	活気のある地域	2	0	4	5	11	5.6%
	その他	7	6	2	8	23	11.6%
	今のままでよい	0	0	4	1	5	2.5%
	思いつかない	0	1	6	1	8	4.0%
Q7-1 実現方法	地域の取り組み・意識	15	4	12	17	48	25.9%
	社会全体の教育・意識	1	1	1	2	5	2.7%
	行政・議員	9	19	3	8	39	21.1%
	企業・事業所	2	5	1	0	8	4.3%
	官民の連携(行政も住民・事	13	4	7	13	37	20.0%
	既にあるものを工夫・展開	0	4	1	0	5	2.7%
	技術的進歩・活用	2	2	3	3	10	5.4%
	あるところに移る・引っ越す	2	0	2	1	5	2.7%
	ほか	4	1	1	2	8	4.3%
	わからない	2	5	9	4	20	10.8%
Q7-2 活動参加意向	能動的活動意思	16	9	15	15	55	29.7%
	受動的活動意思	30	35	21	31	117	63.2%
	意思なし・わからない	4	1	4	4	13	7.0%

※Q7（理想地域像）で、「今のままでいい」、「思いつかない」等の回答だった場合、Q7-1、7-2集計から除外。

本調査は、地縁組織又は志縁組織（アソシエーション型組織）関係者からスタートする機縁法を用いているため、実際の現役世代の平均より、地縁組織や志縁組織の活動経験・意向については、高い数値を示している可能性が高い点に注意を要する。（参考のため数値を示しているが、もともと量的調査ではない）

しかし、地縁活動・志縁活動にも関わりのない人にまでリーチしていること、調査対象とした地区も、全国の他地区でもみられるような地域特性であり、決して特別な地域ではないこと、現役世代を中心とした研究委員会メンバーからも、調査結果は十分に同世代の声、考え方を示している（「きわめて典型的な」という委員発言もあった）との見解で一致していることから、調査で収集した発言には、それなりの代表性があるものと考えられる。

次に対象者の実際の発言を基にして、現役世代の意識の一端を考察してみたい。

【 ヒアリング調査結果の概要 】

- 子育て年代の行動基準は、『子ども（の意向・希望）』
- 地域の同年代の人とも、子どもを介したコミュニケーションが基本
子どもが成長すると、それまでのつながりも切れることも
- 子どもの地域活動の入口は、地域の『お祭り』
- 移住者は、地域とのつながりのきっかけを求めているケースが少ない
- 親と同居している現役世代は、親が地域活動を担当していて、自分はタッチしていないケースが多い。（代替わりするまで）
※例外が、こども会、育成会
- 地域活動に「義務的参加」の人でも、地域活動に対する評価が低いわけではない
- 親・祖父母の介護経験が、自分が高齢時の生活・介護像に大きく影響を与える
- 「子どもに迷惑をかけたくない」が、高齢時での生活・介護像のベースとなっている人が多い。⇒ 施設利用意向は、子どもに迷惑をかけないため。
- 高齢時の免許返納（運転できなくなる）まで想定しての、「交通手段・インフラの確保」を希望する人が多い。
- 将来の地域活動も、「他の人から依頼されれば」（受動的活動意思）は高い。

【 現役世代の地域活動意識等 】（ヒアリングから）

今回のヒアリングから読み取れる現役世代の地域と地域活動に対する意識等を、実際の発言（回答）から考察してみる。

●子育て年代の行動基準は、『子ども（の意向・希望）』

現役世代は仕事を持っているため、地域活動への参加がなかなか難しいことは間違いのない事実である。特に夫婦共に働くことが普通となっている現在、世帯から地域への活動に人を出すのは、多世代同居世帯でない限り、仮に地域活動等への参加に心理的な拒否感がなくても、困難を伴うことになる。

そのようななかでも、「こども」のため、という理由があれば、仕事に関しての時間の調整という手間や、地域活動等への心理的な拒否感を越えて、行動を起こすモチベーションにする姿が確認できる。

「育成会に入っている。町内会や育成会の行事、お祭りに子どもが参加したいようだったので、入会した」（40代女性 B 市）

「ダンスサークルの代表。この代表は、サークルに所属している 6 年生の親が順番にやっている。私も、こどものため」（40代女性 A 市）

「子どもが学校時代は、子ども会でお祭りだとか、いろいろと手伝った。いまは、コロナでお祭り自体が休止している」（50代男性 A 市）

「だんじり祭り（に参加）。子どもたちが行きたいと言ったから。続けている」（30代女性 C 市）

「少年野球指導者（をしている）。子どもが入部したため。交流が増えるので継続している」（60代男性 C 市）

「以前ダンスをやっていた。子どもたちにダンスを教える教室とか、子どもと一緒にダンスを楽しめるサークルがあれば参加したい」（20代女性 D 町）

「自治会行事に子連れで気軽に参加できるものがあれば、「誰々ちゃんも一緒に行こう」とか、そんな感じで誘い合って、行けるのではないかな」（40代女性 D 町）

●地域の同年代の人とも、子どもを介したコミュニケーションが基本

子どもが成長すると、それまでのつながりも切れることも

いまの高齢世代に比べ、地域との関係性が薄くなっていると言われる現役世代であるが、子どもがいる同年代の親にあたる地域の人とは、子どもを話題に介して、付き合いが生まれやすい。特に、こども会や育成会などの地域組織への参加を通じて、地域での交友関係を獲

得していることも多い様子がうかがえる。一方、子どもが成長して、卒業するとともに、ママ友・親同士の交流も薄れていくことが少なくない。それを残念に感じている人の声も多い。

「子どもが大きくなると、ママ友とも疎遠になりがち。子どもが独立したらなおさら。子育てを抜きにしても、友だち付き合いができるようになればいいと思う」(40代女性B市)

「子どもが小さかった頃に育成会に参加。お祭りの手伝いもした。今はそういうことはしていない。子どもが大きくなって育成会を離れると、親も地域の活動から遠ざかってしまう」(50代女性B市)

「近所とは挨拶程度。顔もわからない人も。子どもがいる人とは話をする」(50代女性A市)
「息子たちが野球をしているので、その手伝いとか。一緒に見に行って、他の家族と一緒に応援したり」(50代女性A市)

「子どもの同年代の親とは立ち話。(他は)あいさつ程度」(40代女性C市)

「4歳の子どものがいて、子どもと散歩しているとよく声を掛けられる。同じ地区でなくても、同世代の子どものいる親たちとは親しく付き合っている」(30代男性D町)

「休日はすべて子どものサッカーの練習や試合に費やしている。子どものサッカーチームの試合を見るのが趣味と言えば趣味。ママ友とわいわい楽しくやっている」(40代女性D町)

●子どもの地域活動の入口は、地域の『お祭り』

地域活動を経験したことがない、地域の人と一緒に動いた経験がない人が増えたとは、よく言われることである。確かに本調査においても、そのような(地域活動の経験がない)人は確認された。一方で、今回の調査対象全地区で、こどもたちが地域のお祭りで楽しみながら、地域の人、同年代の子どもたちと一緒に活動した経験を持っていることも確認できた。

「中学生の頃からお祭りの担い手として活動していた。小学生が山車で太鼓を叩くんだが、太鼓たたきの指導を中学の頃からしている。20代で地区の夏まつりの実行委員になった。頼まれてなったが、自然にというか、特別なことをするという意識はあまりない」(50代男性B市)

「子どもの頃は、地区の夏祭りに町内会単位で山車を出していて、育成会に入っていたから山車に乗って太鼓を叩いたりしていた。小学4年生から6年生までが鉦や太鼓を叩く。毎年楽しみにしていた」(20代女性B市)

「育成会に入ることが大事だと思う。子どもの頃に(お祭りとか)楽しい時間をみんなと一緒に過ごす、その経験があるから、その後もずっと関わり続けようという気持ちになる」(20代女性B市)

「町内会で地藏尊祭りというのをやっている。小学生の時に出しものをするので、それに参

加した。そのときの思い出があるので、出しものなどの役がなくても祭りに行く。友だちに久しぶりに会ってお互いの近況を知らせ合ったりする、交流の機会」(10代男性B市)

「地域のお祭りに参加。太鼓をたたいた。楽しかった。思い出に残る」(10代男性A市)

「子ども会するとき、地域のお祭りで屋台の手伝いとか。今は(コロナで)ない」(10代女性A市)

「地区のお祭りの準備とか片付けとかに参加している。近所の人たちと一緒にぼんぼりをつるしたりとか、飾り付けをしたりとか」(10代女性D町)

●移住者は、地域とのつながりのきっかけを求めているケースが少ない

移住者といっても、転勤で来た人、結婚で相手の実家や新しい家に来た人、自ら心機一転、気に入った土地へ移ってきた人など様々ではあるが、地域との関係を持つきっかけを模索している声が多く聞かれた。

「嫁いできたとき、知り合いが一人もいなくて寂しかったが、町内会の行事への参加で知り合いが増えてうれしかった。子どもが小学校に上がると育成会に入った。それがきっかけでさらに地域の活動に関わるようになり、母親同士、子ども同士も仲良くなった。よそ者にとっては、自分から地域に入っていくのはとても難しい。誘ってもらえてよかった」(50代女性B市)

「町内会に入って活動に参加すると、町内のどこにどんな人が住んでいるか、わかるようになる。私のような転入者には、最初のうちはよそよそしさもありつつの付き合いだが、少しずつ打ち解けていける」(30代男性B市)

「(地域活動)一つに参加したことから次々に誘われた。元々地元ではなく知り合いがいなかったのととても助かっている」(40代男性C市)

「自治会には入っていない。以前はマンションに入居すれば自動的に自治会に加入した。ここではどうすればいいのかわからない。誰にどうやって連絡するのか。入るものだと思っていたが」(20代男性D町)

「隣に住む70代の女性とは一緒に料理教室に通ったり、卓球をしたりしている。地元の人たちとの交流は楽しい。いろんな人とつながりができればいいと思っている」(20代女性D町)

「(地域活動に)興味関心はあるが、地元の自治会に入るきっかけがない。集合住宅の住民は誰も入っていないようだ」(40代男性D町)

「元々住んでいる人には当然のことでも、移住者にはわからないことが多い。そういうことを教えてもらえるようにするためにも、自治会活動でつながりをつくっておきたい」(40代男性D町)

●親と同居している現役世代は、親が地域活動を担当していて、自分はタッチしていないケースが多い。(代替わりするまで)

親、祖父母と同居している現役世代の場合、地域活動は親・祖父母の役割となっていて、本人達がタッチしていないケースが極めて多いことが、今回調査で確認できる。この例外は、子ども会や育成会など、こどもに関する地域活動。また、このような場合、いずれは自分たちが地域の活動を親から代替わりするという暗黙の了解も存在しているようである。

高齢者の心身の年齢が、以前と比べて若返っていることは老年学会、老年医学会でも認めており、その分、代替わりの時期が昔に比べ遅くなっている可能性も存在する。そのことが、多世代居住が多い地域での、地縁組織の高齢化の一因となっている可能性もある。

「町内会活動は、最近少しずつ参加するようになった。クリーン作戦とか。父が亡くなり、そのあとを継ぐ感じで」(50代男性B市)

「(地域活動は) 同じ敷地内に住んでいる両親がやっている。公民館や地区の神社の掃除。祭りの獅子を(輪番で) 預かる等」(40代女性A市)

「(地域活動は敷地内同居の) 両親がやっている。どんな活動があるか、よくわからない」(50代女性A市)

「組長とか、来年度からは自分がやる。これまでは両親」(30代女性A市)

「親の世代がやっていて、自分は参加していない」(30代男性D町)

「町内会活動は、父が主に参加している。いずれは父に代わって自分が出るようになると思う」(30代男性D町)

「親の代、祖父母の代が参加していて、私たち世代はまだこれから」(40代女性D町)

「自治会の一斉清掃が年3回くらいあり、参加している。祭りは親の代が役を務めている。いずれ私たちの代にまわってくるだろう」(40代女性D町)

●地域活動に「義務的参加」の人でも、地域活動に対する評価が低いわけではない

地域活動に仕方ないと思いながら、義務的に参加する人は多い。機縁法を用いた本調査でも義務的に参加している人の方が多数となっている。しかし、義務的に参加しながらも、参加してみて、(想定していなかった) 意味を見出す人も多いことが理解できる。

「育成会に入っている。子どもが小学校にあがれば半強制的に加入。入ってよかったと思う。行事を通じて友だちが増えた」(50代女性B市)

「神社の清掃活動や、道路沿いの花壇整備などに参加。隣組の組長さんが「来ない」と声をかけてくれて。気軽に声をかけられる人が増えたし、自分の名前も覚えてもらえた。参

加してよかった。何か困ったときに町内会の役員さんとかに相談していいんだって、それを知っているだけでも大事だなと思う。」(20代女性B市)

「お祭りでお神輿をかついだりして子どもが喜んでいる。そういう子どもの姿を見ると、入ってよかったと思う。役員は面倒だけど、仕方ない。やればやっただけ、楽しさもある。知り合いも増える」(30代女性B市)

「盆踊り。仕事と日程合わず継続していない。交流となるので良い」(60代男性C市)

「町内会活動は、若干煩わしさを感じないでもない。でも、同じ地区に住む人たちが知り合うきっかけになるし、必要な活動だと思う」(40代女性D町)

「祖母が「ここに住むなら(自治会に)入れ」と言ったから。最初は抵抗を感じた。でも、道路やごみ置き場の清掃、草刈りなんかに参加するようになって、大切な活動だと思うようになった。顔の見える関係をつくる、大事な集まりだと思う」(30代女性D町)

●親・祖父母の介護経験が、自分が高齢時の生活・介護像に大きく影響を与える

Q6 高齢時、体が弱ってきたときの対応を尋ねたとき、親・祖父母の介護経験を話したうえで、自身の対応を話される人が少なくない。主として、家族介護の苦勞の点から施設利用意向につながっているが、一方、特養等の長期待機状況や長期利用での費用を現実知ったため、自身では施設は難しいと考えている人もあった。

「父が若年性アルツハイマーだった。認知症の家族介護がどれだけ大変か、よく知っている。自分も認知症になる可能性があると思っている。様子がおかしくなったら、すぐ施設に入れろと親族に頼んである」(50代男性B市)

「介護が必要になったら老人ホームに。(自分の親のように)介護度審査(認定員来訪)のときに強がったりしない。みんなの迷惑」(40代女性A市)

「祖母が施設に入っている。「施設はイヤだ」と言っていた。だからギリギリまで家で面倒を見た。家族の介護の負担が大きくなれば、施設に入るのも仕方ないと思う」(30代女性C市)

「祖母は近所にきょうだい何人かいて、毎日のようにきょうだいや仲のいい友人と集まって楽しそうにしている。そういうことが心身ともに健康を保つのに良さそうだ。認知症予防にもなると思う」(20代男性D町)

「祖母が認知症になり、足腰も弱って転んだりするようになって、両親が面倒を見きれなくなっている。入退院を繰り返している状況。私自身は家で暮らし続けたいと思うが、子どもに負担を掛けるようなら施設に入りたい。その方が自分にとっても負担感なく過ごせる」(30代女性D町)

- 「子どもに迷惑をかけたくない」が、高齢時での生活・介護像のベースとなっている人が多い。⇒ 施設利用意向は、子どもに迷惑をかけないため。

(同様、Q6にて) 家で暮らしたいが、子どもに迷惑をかけるくらいなら施設で、という葛藤からの施設利用意向という回答が非常に多い。また、子どもに迷惑をかけず(迷惑をかけないため) 夫婦で、又は、同年代の友人・知人と、という回答も、地域を問わず見受けられる。

「子どもや親戚に迷惑を掛けるのだけはイヤだ。子どもの世話になるくらいなら施設に入る」(50代女性B市)

「子どもに迷惑を掛けたくないし、手助けが必要な状態になったら施設に入ると思う」(40代男性B市)

「施設には入りたくない。でも子どもたちに頼って、迷惑をかけるのは辛い。気持ちは在宅、現実には施設かな」(50代女性B市)

「子どもたちに迷惑をかけず、自分達の同世代でコミュニティを維持していければ」(40代女性A市)

「一人娘なので、面倒みてもらうのは……。この前まで親の介護をしていた。自分から施設かな」(50代女性A市)

「サービスを使いながら地域で暮らす。極力子どもの世話にならないようにしたい」(30代女性C市)

「子どもに頼るしかないと思うが、迷惑を掛けたくない。できれば家で暮らしたい。でも、まわりに迷惑を掛けるようになったら、お金に余裕があれば、施設に入るだろう」(50代女性D町)

「妻には「助けてくれ」と言っても、子どもには頼りづらい。子どもに負担を掛けたくない」(40代男性D町)

- 高齢時の免許返納(運転できなくなる)まで想定しての、「交通手段・インフラの確保」を希望する人が多い。

近年、高齢者の運転や事故の報道が多くなったことも影響していると思われるが、高齢時の生活や理想の地域像を尋ねると、運転ができなくなったときの交通支援や、買物・病院等の生活インフラの徒歩圏での確保に言及される人が極めて多い。それだけ危機感を覚えているということでもあり、また、公共交通機関が十分でない地域においては、「(住んでいたいのに) 住み続けられない」という危機の表れでもあると考えられる。

「私が住んでいるあたりは、バス路線がない。バスがあれば、運転しなくても助かる」(40

代男性 B 市)

「移動支援は必要だと思うが、祖母が在宅だった頃、そういうサービスがあっても使わなかった。使い勝手が悪い。使い勝手のいいサービスができてくれれば」(30 代女性 B 市)

「交通の部分。(運転できなくなったとき) 安くタクシーの回数券を配布してもらうとか、バスの便数などを増やして利便性を上げてくれるとか。金額が大事」(50 代女性 A 市)

「自分で運転できなくなることを考えると、それに代わるサービスを。(配達ではなく) スーパーとか、見て買いたい。ボケ防止にもなるし」(40 代女性 A 市)

「病院に行くことができるバスがある」(40 代女性 C 市)

「坂道が多いので循環バスを増やして欲しい」(40 代男性 C 市)

「交通インフラは充実してほしい。スーパーが近いといっても、高齢になって体が弱れば、歩いて行けるとは限らない」(30 代男性 D 町)

「車の運転ができなくなったら、買いものや通院に困る。住んでいる地区は町の中心部だが、最寄りのスーパーに歩いて行き来するのはちょっと無理。車がなくても気軽に、すぐに使える交通手段があると助かる」(40 代女性 D 町)

●将来の地域活動も、「他の人から依頼されれば」(受動的活動意思)は高い。

現役世代の(将来の)地域活動への参加意向であるが、自分からは動かない(動けない)ものの、他の人からの協力の要請があれば自分のできる範囲で協力するという受動的活動意思は多くの人を示した(本調査対象者では6割強(63.9%))。

能動的活動意思(自分から動く)を示した人も3割(29.0%)存在するが、調査方法から、かなり割り引いて考える必要があると思われる。この3割分が実際にはある程度、受動的活動意思層や活動意向なし層に流れると仮定しても、現役世代の相当な割合は、将来の地域活動に可能な範囲内での関与を期待することはできそうである。

ただし、協力を要請するあるべき地域ビジョンと、依頼をする経路(誰がどのように協力依頼をするか)をどう考えるかにより、この活動意思・協力意向も変わってくることに留意する必要がある。

「自分から率先して何か仕掛けるといったことはないと思うが、地域のつながりをつくっていくのに役立つことなら、協力したい。やらざるを得ないと思う。他人事ではないから」(50 代男性 B 市)

「自分から何かしようとは思わない。責任を負うのは避けたい。交流イベントをやるから手伝ってもらえないか、といった話があれば、それくらいはやると思う」(40 代男性 B 市)

「年金もらえるまで働かないといけないけど・・・その後なら、やれる範囲でやりたい」(40 代女性 A 市)

「自分から動くタイプではないので、やれる範囲で。背中を押してもらおうきっかけがあれ

ば。お祭り騒ぎは好きなので(笑)」(50代女性A市)

「頼まれて出来ることであれば手伝う」(40代女性C市)

「(手伝いであれば)可能な限り参加したい」(50代男性C市)

「自分で活動を立ち上げるのは無理。役場や社協が、見守りのネットワークをつくるから参加してほしい、というならできる範囲で参加してもいい」(40代男性D町)

「交流の機会をつくるとか、いろいろあると思うが、実際そのために何をすればいいのか、まったくわからない。「こういうことをしよう」という人がいて、手伝ってほしいという話があれば、手伝う。自分から何かアイデアを出して、というのは苦手だから」(30代女性D町)

第 3 章

『そろそろ2040年の話をしようか？』 オンラインフォーラム開催

本事業の一環として、多くの価値観を持つ多世代の住民により、生活支援体制整備における今後の地域づくり活動の展開を考えるフォーラムをオンラインにて開催した。

フォーラムの企画・プログラムは、それまでの研究委員会での議論などを参考に、事務局が原案作成のうえ、委員会で討議し決定した。

以下、フォーラムの概要を記す。

※ フォーラムの告知チラシと当日資料は、本報告書参考資料 48 頁以降に掲載

【 フォーラム概要 】

○タイトル 『そろそろ2040年の話をしようか？～多世代での協働と持続可能な地域の姿とは～』

○開催日時 2024年 2月22日（木） 13:30～16:50

※当初予定を20分超過

○ZOOM（ウェビナー）利用

○対象 生活支援体制整備事業担当者、生活支援コーディネーター想定

※ ただし、参加者限定はしていない

○告知方法 全国自治体に対するDM案内

法人HPでの開催案内

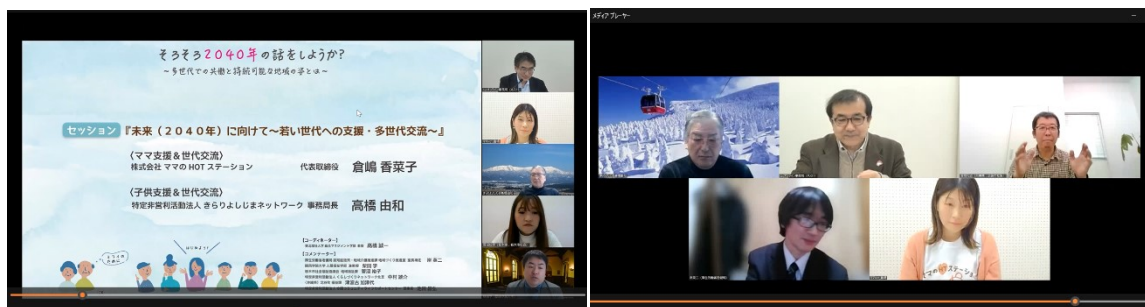
研究委員会メンバーのSNSによる告知協力

一部都道府県で自主的に、県下市町村に追加案内

○参加申し込み 331人（申込グループ数250）

○当日アクセス ピーク260強

※実視聴人数 事務局推定300人超



【 プログラム 】

- 開会挨拶
- 基調講演 『2040年（20年後）に向けて』
- セッション1 『未来（2040年）に向けて ～若い世代への支援・多世代交流～』
 - （実践報告）北海道 ママのHOTステーション
 - （実践報告）山形県 きらりよしじまネットワーク
 - （意見交換・質疑応答）
- 休憩
- セッション2 『未来に向けた私の提言 ～自分の地域を考えた～』
 - （構想・提言） 兵庫県 淡路市社会福祉協議会
 - （実践報告） 山形県 きらりよしじまネットワーク
 - （意見交換・質疑応答）
- 閉会

※セッション中、時間の関係で扱えなかった質問は、後日事務局から返信

◎フォーラムの当日資料は、本報告書参考資料50頁以降に掲載

- - - - -

【 企画背景となる問題意識 】

- 現在の生活支援体制整備事業は、昔に比べ弱まっているとはいえ、地域の支え合いがある程度あることを前提に、それを支援・強化し、地域生活を維持・充実させることを目的としている。
- しかし、現在の若い世代（現役世代・特に団塊ジュニア世代以降）では、地域での「支え合い」そのものを経験しておらず、地域活動に重要性を持っていない、活動する意思がないことも予想される。
- このような団塊ジュニアが高齢世代になる 2040 年以降の生活支援体制整備事業は、どのような方向性に基づき、展開されるべきなのかを考える。
 - ⇒ フォーラムのタイトル『 そろそろ 2040 年の話をしようか ？ 』

【 プログラム意図 】

●基調講演（導入）

- ・本事業の目的が、具体的なノウハウや特定業務を対象としたものではなく、やや抽象的なテーマであるため、現段階でとりあげる意味を参加者に説明する。
- ・本フォーラムと事業の社会背景等を解説し、参加者の現在の業務・問題意識とのつながりを意識してもらう。視点の転換。

●セッション1「若い世代への支援・多世代交流」

- ・「支え合い」を感じたことがないような、若い世代への支援と、高齢世代との交流を図るような具体的な取り組みの紹介
- ・このような取り組みを経験することで、現役世代にも、支え合い活動の意味を知ってもらえるのではないか、という問いかけ。
- ・生活支援体制整備は、「高齢者だけ」の参加の場を提供するものではないというアピール ⇒ 地域での多世代交流が可能な仕掛けを積極的に取り組むべき
- ・高齢者世代は「支援されるべき存在」という固定観念からの転換。活躍の場づくり、他世代への支援者という発想。

＜ママの HOT ステーション・倉嶋委員＞

子育てママへの支援に高齢者が活躍。ママには他人に「頼っていいんだ」という意識。高齢者には、子ども（孫世代）との触れ合いの機会・他者への役立ち感。

＜きらりよしじまネットワーク・高橋氏＞

高齢者を含む地域全体での子ども支援。子どもたちが、高齢者を含む地域が、自分達のために行動・応援してくれるという感覚の獲得。

●セッション2「自分の地域を考えた」

- ・現在のボランティアな地域の「支え合い」は、将来は難しいのではないか。なんらかの仕組み化を考えるべきでは？という提言と、実際に地域を仕組み化した事例紹介
- ・単に、地域の居場所づくりや御用聞きでいいのか、という問題提起。

＜淡路市社会福祉協議会・岩城委員＞

生活支援 Co が「本気」で考えた地域の仕組み化将来構想

＜きらりよしじまネットワーク・高橋氏＞

若者を取り込んで、地域組織を再編成・活性化した組織。地域を支える RMO のひとつの形。

【 参加者からの評価 】 ～参加者アンケートから～

フォーラム参加者に、ZOOM 機能によりフォーラム退出時に回答依頼をする形式の参加者アンケートを実施した。フォーラムでの議論が白熱したため、終了予定時間を 20 分超過したことにより途中退席者（アクセスカウントの減少）が増加したが、最終的に 91 人より回答を得ることができた。

設問は4つ。

Q1. 回答者の職種

Q2. 評価（5点満点）

Q3. フォーラムの良かった点、印象に残った点（自由記述）

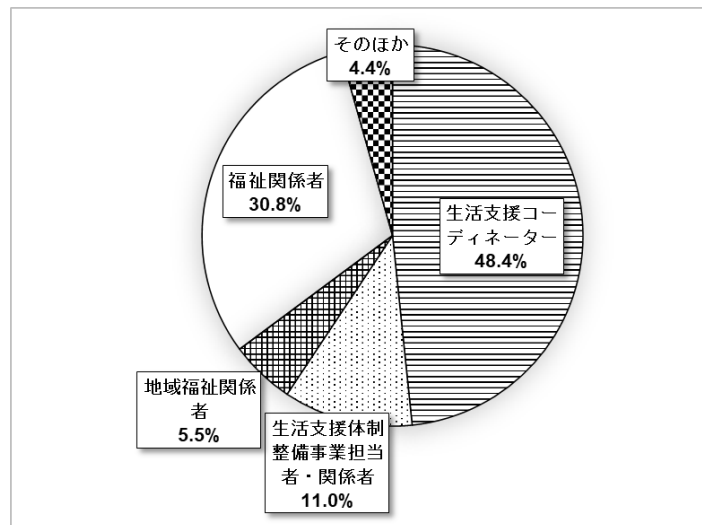
Q4. フォーラムの改善してほしい点、今後取り上げてほしいテーマ（自由記述）

アンケート結果をもとに、今回フォーラムを振り返る。

① 参加者（回答者）職種（Q1）

最も多かったのは、「生活支援コーディネーター」（46.4%）で、「生活支援体制整備担当者・関係者」（11.0%）と併せて、6割が生活支援体制整備事業関係者であった。このほかに、「福祉関係者」（30.8%）が、3割に上っているが、これは、生活支援コーディネーター等と同じ事業所に配属されているスタッフ、例えば、地域包括支援センターの別スタッフ（保健師や社会福祉士）等が多いものと思われる。

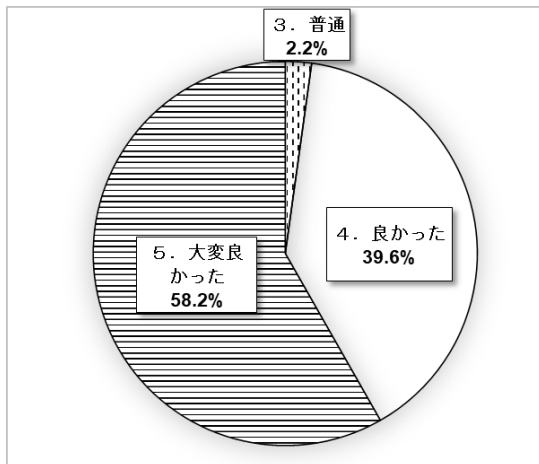
おそらく事前告知の段階で、フォーラムのテーマや登壇者の実践発表内容などに関心を持った生活支援体制整備事業関係者の同僚が、予想以上に多かったものと推測される。



参加者	回答数	%
1. 生活支援コーディネーター	44	48.4%
2. 【1以外の】生活支援体制整備事業担当者・関係者	10	11.0%
3. 【1. 2以外の】地域福祉関係者	5	5.5%
4. 【1～3以外の】福祉関係者（行政、社協、民間事業所、NPO等含む）	28	30.8%
5. その他（地域福祉に関心のある方、登壇者の友人、ほか）	4	4.4%
計	91	

② 評価 (Q2)

5点満点として評点をつけていただいたが、「大変良かった(5点)」が58.2%と最も多く、以下、「良かった(4点)」が39.6%、「普通(3点)」が2.2%で、マイナス評価は1件もなく、平均評点は4.6点と極めて高い評価となった。



評点（5点評価）	回答数	%
1. 大変良くなかった	0	0.0%
2. 良くなかった	0	0.0%
3. 普通	2	2.2%
4. 良かった	36	39.6%
5. 大変良かった	53	58.2%
	91	

③ 良かった点、印象に残った点 ※Q3 具体的回答は、後掲

セッション中の個別の発表や提言に印象を受けた意見も多く見られたが、全体的には、セッション2を中心として、発表者、コメンテーター含めた忌憚ない意見交換が評価を受けた様子うかがえる。

「一般的な Zoom の説明会は聞くだけですが、司会者や参加者の掛け合いが面白かった。全体的に、今まで参加した中で一番良い Zoom 会議だったと思う」

「登壇者の方々のぶっちゃけた裏話が伺え、よかった」

「研修会やフォーラムに参加すると、きれいにまとまった話しか伺えませんがそれぞれの方から本音に近いと思われることが伺えてよかったです」

「セッション2の意見交換・共有も含めて人間味のあるトークセッションで楽しく拝聴したのと、共感を持つ点もありとても参考になりました」

「全体進行が上手で、登壇者のみなさんの素の声を引き出してくれていたのがよかったです」

などが代表的な意見として挙げられる。これは、登壇者メンバーが、研究委員会メンバーを中心としていたため意見交換に慣れていたこと、委員会メンバーではない登壇者もフォーラム等の参加経験が豊かで、議論に積極的に参加する人であったことなども寄与していたものと思われる。

フォーラムのテーマに関わる意見としては、

「多世代・多機関を巻き込んで取り組んでいる活動を知ることが出来てとても良かったです。高齢者支援という枠組みに囚われていましたが、その考えを見直すことが出来ま

した」

「高齢者の幸せなくらし」を目標としてぶれずに様々な取り組みをする必要性について学べたこと。高齢者福祉とまちづくりがセットということ、介護保険をうまく生かした地域づくりについて勉強になった」

「高齢者＝支援対象、子育て世代＝支援対象という考え方だけではないということ」

「思いもよらない発想や高齢者でもやってもらうだけでなく、やれることをしてもらう」

「高齢者支援という枠内でしか考えていなかった自分に気づかされた」

「高齢者だけが幸せになる地域はおかしい（笑）地域に住む方がみんな幸せになれる方法を考えていきたいです」

「私は市職員で、今年度社会教育分野から高齢者福祉分野に異動になり、整備事業を担当しています。高齢者に関する課題は高齢者に限らないというのは前部署で業務をするうえでも感じていましたが、なかなか取り組めていない分野でした。今回、高齢者を切り口にするのではなく、別の切り口からの多世代交流・多世代間支援の事例を聞けて、視野の広げ方を学ぶことができました。ありがとうございました」

などの感想が寄せられた。

単なる高齢者の支援にとどまらず、今後の持続可能な地域の支え合いをどうあるべきかを本気で考える、高齢者にも多世代交流等を通じて地域で活躍してもらう、それが持続的な地域づくりにつながるという視点に気づいてもらうというフォーラムの意図は、一定以上達成されたものと思われる。

④ 改善してほしい点、今後とりあげてほしいテーマ ※Q4 具体的回答は、後掲

改善要望はあまり多くなかったものの、質問（質疑）の形式をわかりやすくという声や、（一般）参加者の意見・コメントが見られたら、という要望は、次回以降の検討課題として重要な指摘と受けとめている。フォーラム全体の時間についての意見もあったが、参加しやすさから2時間以内に、という意見もある一方、もっと時間を設けて話を聞きたいという声もあり、開催者としては悩ましいところである。

今後とりあげてほしいテーマについて多く寄せられているのが、今回のセッション2であった提言をおこなった発表者と厚労省担当者との対談続編の希望であった。

また、今回のテーマそのままで続編や、同様に現場の生活支援コーディネーターの意見交換会の希望も出されている。本音ベースでの関係者の声を聞きたい、意見交換をしたい、という想いの表れと捉えており、次の機会の折りには、参考として取り入れていきたい。

問3. 良かった、印象に残った点 【1/4】
情報提供していただいた皆様、全てが基調講演でした。地域づくり、何かとご苦勞も多いと思いますが、疲弊感が全く感じられず、むしろ楽しんでいる印象を受けました。 自分の傾向を分析する良い機会になりました。
本来の多世代交流へのつなぎ方の大きなヒントになりました。
多世代交流、高齢者が笑顔になると、ほかの世代にも波及すること。
15時から他の会議の為退出してしまい、最後まで聞けず残念です。
「高齢者の幸せなくらし」を目標としてぶれずに様々な取り組みをする必要性について学べたこと。高齢者福祉とまちづくりがセットということ、介護保険をうまく生かした地域づくりについて勉強になった。
厚労省の方のコメントが刺さりました
高齢者の方と子育てを一緒に支援をしていくという活動報告について
ざっくばらんに意見がうかがえた。
枠に囚われない発想が大切と学びました。
ママのHOTステーションがすごいなと思いました。
岸、岩城対談期待します。
倉島さんのSCの苦勞は共感できました。
厚労省岸さんの話、倉嶋さんの話
多世代・多機関を巻き込んで取り組んでいる活動を知ることが出来てとても良かったです。 高齢者支援という枠組みに囚われていましたが、その考えを見直すことが出来ました。
登壇者の皆様の活発で明確なコメント、スムーズなzoomな画面進行
きりよしじま高橋さんの自治体での対応の考え方
トークセッションでの、皆さんの熱い思いがいちばんおもしろかったです
ママのHOTステーション立ち上げ等について、話を聞いたこと。岩城さんの歯に衣着せぬ発言が聞けて良かったです。
地域で多世代交流を企画していきたいがなかなか難しい。どこに話を持っていけばいいのか、人材をさがしたりすることをまずやっていきたいと感じた
高齢者のためのコーディネーターという概念が覆りました。またこのような演題で講演をしてほしいです。するどい切り口の対談も期待したいです。
やりたいことが明確でぶれない姿が印象的で説得力もあった
対話、ワークショップの重要性。視点の切り替え
高齢者支援という枠内でしか考えていなかった自分に気づかされた。
高齢者だけが幸せになる地域はおかしい（笑）地域に住む方がみんな幸せになれる方法を考えていきたいです。
事例が凄すぎたのと本音の発言が聞けた
思いもよらない発想や高齢者でもやってもらうだけでなく、やれることをしてもらう。最後の皆さんのお話大変参考になり、楽しく聞かせてもらいました。
厚生労働省の岸さんと淡路市社協の岩城さんのセッションがとても印象に残りました。
普段と違った目線でのお話で、興味深く聞かせていただきました。
厚労省岸様の投げかけで、登壇者の方々のぶっちゃけた裏話が伺え、よかった。
普段の業務にとらわれ過ぎていた部分があったかなと思うので、自由に幅広い視点を持っていこうと思えました。建設的・前向きに本音で話すことの大切も感じました。

問3. 良かった、印象に残った点 【2/4】
全体進行が上手で、登壇者のみなさんの素の声を引き出してくれていたのが良かったです。発表者の方々のところに実際に活動見学に行ってもっと詳しくお話を伺いたいと思いました。
倉嶋さんがSCの仕事は楽しいが行政の縛りが嫌で独立したという点
私は市職員で、今年度社会教育分野から高齢者福祉分野に異動になり、整備事業を担当しています。高齢者に関する課題は高齢者に限らないというのは前部署で業務をするうえでも感じていましたが、なかなか取り組めていない分野でした。今回、高齢者を切り口にするのではなく、別の切り口からの多世代交流・多世代間支援の事例を聞けて、視野の広げ方を学ぶことができました。ありがとうございました。
高齢者という視点だけではなく、幅広い世代で考えていく必要があると活動報告を聞いて思いました。地域づくりは地域で考えるということも限界があるため、企業等様々な団体とも連携して考えていく必要があると改めて感じました。 色々な話がとても楽しく聞けました。ありがとうございました。
発表についてコメンテーターが補助的な役割もあり、またディスカッションもあり良かった。
実践者のざっくばらんな話が聞けた。財政的な垣根を越えることは難しいが、困難があったという話自体が参考になるのでありがたい。また、介護保険、介護認定の基準が現状にそぐわないという点は、非常に同意できる。
地域を活性化していくことにもものすごくエネルギーを注いでくださる方がこんなにたくさんいらして、実際に実績を出しているお話を聞かせていただいて、できないことはないなと感じました。いまは理解してもらえないことでも、少しずつでも活動を継続していけるようなものを残していけたらなと思いました。
厚生労働省の岸さんの口から「高齢者だけが元気になる地域ではだめだ（意識）」という発言があったこと。どこの自治体でもそうだと思うが、行政所管課と現場で住民の声を聞いているSCでは視点が異なる。今後は「高齢者も元気になる地域づくり」を進めるコーディネーターだという自覚を持って地域に出て行こうと思った。
自由な本音の対談がとても良かった 私もSCの仕事が大好きですが、一部行政担当者や某大学から招いているアドバイザーのミクロな視点が本当にストレスです 早く変わってほしい
介護保険や縦割りの難しさはあるものの、人口減少が進む中で多世代交流は重要であり、可能な限り連携できる部分を増やしていけるよう取り組みたい。
厚労省の考えを聞けたこと。現場の困惑を聞いていただけたことに関して、国の考えもあったのが救いでした。倉嶋さんはその枠を飛び越えられ、成功された素晴らしい例だと思います。
一般的なZoomの説明会は聞くだけですが、司会者や参加者の掛け合いが面白かった。特に岸さんと岩城さんのやり取りが面白く、全体的に、今まで参加した中で一番良いZoom会議だったと思う。参加して良かったです。
それぞれ勉強になる話ばかりでしたが、最後の先生方の討論が「そういう考え方もあるのか」ととても身になりました。
他地域での取り組みや、SCの心構えを知ることができた。
若者も高齢者も大きく変わっていく、どの世代も主役化する。やりたいという想いを引き出したり、待つことがコーディネーターの大きな役割になること
人と人との世代を超えたつながりが地域の問題を解決していく未来が見えた感じがした。誰もが、何かをしたくなる場づくりに関わっていけたらいいなと思いました。
多世代との繋がり、協働が大切

問3. 良かった、印象に残った点 【3/4】
倉嶋さんに共感。生活支援コーディネーターはとてまたのしくてやりがいがあったのに、子育ての支援と高齢者の支援と一緒にやるなという行政の支持にひるまず実行した、その姿勢に自分も勇気が湧いてとても楽しく拝見しました。岸さんの毒舌楽しかったです。岩城さんと岸さん対談が叶ったら必ず参加します！ご連絡ください。
地域での実践者の本音をうかがうことができたように思います。 自治体で生活支援コーディネーターが一人であり、役割について悩むことも多い中、住民の幸せを目指して、やれることがたくさんある仕事だと改めて感じました。
岸さんのある程度の本音が聞けたこと。 生活体制整備事業は高齢者に対する事業ではあるが、結果として高齢者の社会参加になるような多世代の交流という視点が必要であるということを感じた。
事業にとらわれない地域作りの事例を聞いた点と、多くの識者からの質問から多くの知見を得られるのが良かったです。
ママHOUTのような活動を自分の地域でぜひやりたいと思いました。高齢化率50%を超えた町です。元気な高齢者と若者が交流できる活動、赤ちゃんを抱く高齢者の笑顔を思い浮かべワクワクします。
研修会やフォーラムに参加すると、きれいにまとまった話しか伺えませんがそれぞれの方から本音に近いと思われることが伺えてよかったです。 岸さんのお話をもっと伺いたかったです。
SCという高齢者支援にとらわれない柔軟な取組を聞くことができた点
岸さんを通じて厚生労働省の本音？を垣間見れたのがよかった。どうしても公式な場では形式的な説明になったり、事業開始の背景なども堅い説明になってしまうので。 あとは、倉嶋さんがSCを辞めることになったきっかけは、SC関係者として考えていく必要があるなと思います。
うまくいった点だけでなく、その過程やぶつかった壁などがあったということがわかって良かった。
したいと思える、ワクワクできるようなきっかけ作り、心地良い場所や人とのマッチング、普段からの関係性の大事さ等々、改めて感じ、これからの業務に繋げていきたい。もっと地域のこと・社会資源を知り、地域の方の声に耳を傾け、一緒に盛り上げていけるような関わりができるようになっていきたいと感じた。目からウロコで視野が広がり、新たな学びが沢山あった。枠組みに捉われず少し広げて考えることで見える景色も変わる視点を持ち、取り組んでいきたいと思う。
地域越境、庁内連携をし多様性に対応するための社会参加の引き出しを増やしていくことを目指していく。
事例がたくさんでよかった。はじめて4、5年と20年のお二人のそれぞれの始め方と今が伺えてよかった。
生活支援コーディネーターが子育て世帯と関わることの是非について
どのパネリストの方のお話も、事例を取り上げての内容ということはありますが、抽象的ではない手触り感のあるお話で他自治体で地域の実情は異なりますが、抱えている地域課題としては大きくは変わらないことから、自分の「発想力」や考え方に対して、とても前向き受け取めることができました。またセッション2の意見交換・共有も含めて人間味のあるトークセッションで楽しく拝聴したのと共感を持つ点もありとても参考になりました。貴重な機会をいただきありがとうございました。
生活支援コーディネーターとしての活動において色んな考え方や切り口があることを知ることで良かったです。
淡路市社協の岩城さんの話が面白かったです。SCとして活動している中で感じていたこと、共感が多かったです。まだまだお話聞いていたかったです。自分も熱意をもって活動していきたいと思いました。セッション2から参加したので倉嶋さんの話は詳しく聞けなかったのですが、若い世代の理解なども不可欠だと実感していて、高齢者だけが安心して暮らせる地域づくりではだめだと感じていました。自分の町でも考えていきたいと思います。厚労省の岸さんのお話も大変面白かったし、私も「高齢者」という言葉が嫌いなので、共感しました。

問3. 良かった、印象に残った点 【4/4】
市担当者としてはどうしても部や課の線引きもあり、生活支援体制整備事業は高齢者のためのものとしての考えが強かったように感じます。登壇者の皆様のお話を聞き、生活支援体制整備＝地域づくり＝多世代で取り組むべきことであると感じたところです。内部の体制を変えるのは難しいですが、支援者側がこの視点を持って取り組むこと、それを踏まえたビジョンを市民に提示して自分事として考えてもらうことが大事だと思いました。
講演すべてが良かったです
どの事例も大変参考になりました。コーディネーターの悩みや行政との関係性などお聞きして、同じ悩みを持っているんだなと思いました。町の方に反対があっても、負けない気持ち大事です。私も強くなりたいと思いました。
コーディネーターとしての視点をいろんな観点から学べました
同じ問題を抱えているところが多いんだなと改めて感じた。 住民が誰でも「支える側」になれる、支えてもらえるサービスを利用できる環境ができるような関係の構築ができればと感じた。出番、役割を持てることで活力が生まれる。高齢者支援が主に取り上げられるが、いきいき高齢者を増やすには、子どもや若者いろいろな人と関わり、出番を持てる場や関係づくりをより考えたいと感じた。 今後もしばしば場や人をうまくつなげる努力していきたい。
最後の対談がとても良かったです。 私も岸さんの物言い、好感です(笑) 厚労省にそんな方がいてくださることは大きな意味を持つと思います。
対談
・「エンパワメントを見計らって戦略的に」ということ ・高齢者＝支援対象、子育て世代＝支援対象という考え方だけではないということ ・支援者側主導ではなく本人たちから声があがらないといけないということ

問4. 改善してほしい点、もっと深めたいテーマや話題 【1/3】
次回また同様のフォーラム等ありましたら、ご紹介をお願い致します。
垣根を超えた話し合いがまた聞けたらと思います
岸さんの話をもっと聞いてみたいです
特に前半の時間配分。
岸さんと岩城さんのトークセッションをぜひ開催頂きたいです！
セッションで盛り上がっていたので、時間をもっと長く聞いていたいです
岩城さんと岸さんの対談をお願いします。
質問の形式をもっとわかりやすく変えてほしいです。時間がもったいないです。
ぜひ講師に高橋先生と岸先生をお招きして対談を聞いてみたいです
重層も含めたコーディネーターの実践。
最後になって盛り上がり、視聴していて興味深かったので、自由テーマのトークの時間を長く取ってもらえたら良いと思った。また、他のSCさんたちがどのように「縦割りの壁」に挑んでいるか知りたい。
都道府県単位で市役所職員・社協職員とCLC関係者、厚労省の岸さんから、今日の事例等をもとに、これからについて話が出来たらいいなと思いました。 とても有意義な時間でした。ありがとうございました。
厚生労働省の岸さんと淡路市社協の岩城さんの対談を見たいです。
行政の縦割りによる地域づくりへの弊害
岸さんと岩城さんの立場が守られた上での、対談是非希望です。
岸さんと岩城さんの対談希望します！地域運営組織のことをもう少し聞きたかったです。
岸さんから国としてのビジョンや今後のSCのあり方を伺いたい。
岸さん岩城さん対談をされる際は視聴したいと思います。
発表者の時間配分の都合もあり、発表に対して理解が追いつかないところがあった。
同じような内容で良いので、今後もとがった話をできる人材を見つけてきてほしい。
岸・岩城対談もものすごく興味があります。また、厚生労働省には、ぜひ法改正または事務連絡を発出していただき、地域コーディネーターが子育て世代を巻き込んでもよいという根拠として使えるものが増えれば、活動の強い後押しとなると思うので、岸さんには頑張っていただきたいと思います。
やっぱり岸さんと岩城さんの対談が見たいです！
続編対談楽しみにしています 見逃さないようにするにはどの様にすればいいのでしょうか
今回の会議、非常に面白くて、ためになると思いました。私は町職員ですが、コーディネーターにも見てもらえたら良かったと思うのですが、今回の会議の動画等を後日、YouTube等で視聴する事はできませんか？もし動画をUP予定なら、案内メールにURL等を送付頂きたいです。
時間配分。どのタイミングで休憩があるのかも前もって知りたいです。倉嶋さんや岩城さんたちのお話がユーモア交じりで聞きやすかったです。講義だけでなく、最後のように立場が違う先生方の討論をもっと聞いてみたいと思います。
参加者の質問ではなく、率直な意見、コメントなどが見れたらよかった
岸さま岩城さまの対談を楽しみにしています。 ありがとうございました。
厚生労働省の方と地域の方が本音で前向きに直接意見を交わすことは珍しいと思いますので、機会があればぜひ聞いてみたいです。

問4. 改善してほしい点、もっと深めたいテーマや話題 【2/3】
介護保険から生まれた生活支援コーディネーターですが、高齢者だけを対象に介入しても、地域課題の解決は難しいと感じています。今回参加した理由も、将来に向けた話として、多世代交流がテーマの一つになっていたからです。生活支援体制整備事業から持続可能な地域づくり、というテーマは、とても魅力的に感じます。
高齢化が進む中で移送問題が避けて通れない課題かと思います。突っ込んだ話をお聞きしたい。
全体のボリュームが大きく、もっと話を聞いてみたいと思いました。
岸さんが皆さんの本音の部分をうまく引き出されていてとても良かったです。
岸さんと岩城さんの居酒屋でのバトルをyoutubeなどで配信してもらえると面白いかも。それは置いて、事例の共有は重要なのですが、地域の実情は様々で同じことは他の地域で出来ないのが、岸さんが高橋さんや倉嶋さんに聞いていたように、事業を始めたきっかけの深堀、事業への思いの深堀、事業を始めた時の最大のピンチ、取り組みにおける今の課題感や今後やっていきたいこと、それをするために必要なこと、もの、ひとを深堀していくようなセッションがあればと思います。書きながら限られた時間で難しいとは思いますが。
貴重な機会をありがとうございました。対談実現しましたら楽しみです。
住民たちの「自分たちがこれをやりたい」を引き出すまでの手法についてSCの関わり方を教えていただきたいです。3時間のフォーラムは長いので、2時間を限度に開催していただけるとありがたいです。
生活支援体制整備事業と重層的支援体制整備事業の同時受託で、担当もおおよそかぶる時、2つの目的近いなか、特に計画ないスタートで、報告だけ場当たり的にやったことベースで高齢者向けを生活支援体制整備事業にわけている実態です。行政側（村）は担当すぐ変わるので、理解が深まっていくのは待てない、待っているうちに人が変わっていく。体制整備まで到底いかそうなかで諦めない勇気をください。まあ勝手に小さくは動きますが、合意がない中や順番が違う時、こじれる。社協一行政間の大枠合意を課長一事務局間でやると現場との乖離が大きい、どうしたらよいでしょうか。地域に力があることを私だけ知っていても、社協内、行政へうまく伝えるルートがない。地域福祉計画と一緒に作っておりません。出てきたものをみて、（そんなの反対というものを見て見ぬふりして）今必要なことをあてこんで報告しています。このままでよいのでしょうか。PDCAもまともにできない中ですが、OODAループの評価軸を両事業に取り入れて見える化できるシートなどないものではないでしょうか。つれづれとすみません。ルーム機能で、他市町村の同じような状況で（すすんでいる）担当者と意見交換できる会があったら参加したいです。ピアサポート求ム。
岸さんと岩城さんとの対談
テーマとしては、住民主体での地域づくりについて話を聴きより一層に関心を持ちました。また、セッション2の後半からお話の出ていた岸さんと岩城さんの対談はぜひ拝聴したいです。
岩城さんと岸さんの対談、ぜひ聞いてみたいです。よろしくお願いします。
登壇者の皆様の話の内容が濃いため、駆け足になり時間が足りないなと感じました。セッションの中でPDCAサイクルや支援設計について話がありましたが、委託先包括のPDCAサイクルに基づいた事業実施が弱いと感じており、市としても指導できるほどではないと感じているため、どのように手法を学び、ツールを使って行っているのか教えていただきたいと感じました。岩城さんと岸さんの本音の対談、ぜひ聴講してみたいです。
最後の盛り上げりの場での、厚労省の岸さんと岩城さんの今後の対談が気になりました。柴田学さんの講演もあれば聞きたいと思いました。
まだまだお話しをお聞きしたかったのですが、次の会議があり全部聞けず残念でした。
地域の方が主体となっていくためのより具体的なアプローチ方法やたくさんの事例に触れたい
セッションや提言、貴重な話を聞くことが出来ました。最後のコメンテーターとの掛け合いが非常に充実していて日頃のもやもやにいい刺激になりました。面白かったです、こんな形でフランク？固くない話を聞く機会欲しいなと思いました。ありがとうございました。

問4. 改善してほしい点、もっと深めたいテーマや話題 【3/3】

途中、どうしても中座しなくてはならず、高橋さん・岩城さんのおはなしが聞けませんでした。ぜひ、アーカイブ配信を希望します！！

私も今は高齢者認知症のグループホームでパート勤務しながら、包括的性教育の講師として活動しています。（思春期保健相談士でもあります）

今の高齢者・フレイル世代・子育て世代・若者・障がいのある人も生活困窮で苦しんでいる人もみんな話を聴いてほしいはず。市民は意見もアイディアも持っています。

助けが必要な人がいるはず。でも言えない。言っていい場所がない。

市民の声を聴いてもらえない、行政は声を拾えてない、役所は敷居が高い…

私自身に今何ができるかと、もっと雑談からつながる何かをと日々、模索しながら動いています。

とりあえずは、すぐにできることから、と思い我が子の通う小学校のコミュニティスクールを活用し、性と介護の雑談の居場所を開催しています。（毎月一回、二時間・完全にボランティアですが…）

本当はスウェーデンのような、ユースクリニックを日本でも国主導でやってほしい。

私がやりたい。（現在、性教育が必要だと訴えている助産師、医師、民間企業が少しずつですが実施されているところもありますが、みなさん手弁当でされているところがほとんどです。）

でも今の日本の医療制度・保険制度の中ではむずかしい。

私がプラスアルファで提案したいのが、ユースだけでなく、多世代も同じ場所でふらっと立ち寄れたら、雑談の中から各専門機関におつなぎできるんじゃないかとも思っています。

（今、勤務しているグループホームで認知症カフェを大阪府貝塚市の委託で担当し運営しているので、余計にそう思います。）

もう少し、市民同士がつながりやすい居場所、関係性づくり、システム、専門家の投入などを官民一体となって今動かなければ、

2040年なんかに到底間に合わないだろうなあ…とってしまいます。

でも、今日のフォーラムを伺ってできることからやっていきたいです。

ぜひ、実現に向けて大人がアップデート、ブラッシュアップしてほしいし、人に言う前に自分がまず動こうと思います。

短時間でしたが参加できてとてもよかったです。ありがとうございました。

他の業務で最後まで聴けなかった（16:30以降）ことが残念でした

第4章

事業の総括

1. 事業背景となる問題意識

本研究事業においては、厚生労働省担当部署との意見交換を重ねた中で、将来の生活支援体制整備事業において、特に団塊ジュニアのような、これまでの高齢者に比べると地域に対する意識が薄い（又は地域との関りの経験がうすい）と考えられる若い世代が高齢になるとき（2040年頃）、「地域の支え合い」を支援するという今の生活支援体制整備の基本的な考え方（生活支援コーディネーター＝地域支え合い推進員）で継続可能なのかが、大きな論点として挙げられた。これは、生活支援体制整備事業のみならず、地域支援職全般に関わる問題とも言えるだろう。

具体的には、以下の2点を問題意識として設定した。

- ① 今後高齢者となる世代、特に団塊ジュニア等の現役世代は地域・地域活動についてどう考えているか、今は仕事等で忙しいとしても、将来、地域活動、支え合い活動等に参加する意向はあるのか。
- ② 将来を見据えて（高齢時の）地域での生活を考えるとき、今のボランティアを中心とした支え合いで継続は可能なのか、代わる方法はあるのか。

上記の1を確認・検討していくための基礎として現役世代を中心とした住民意識ヒアリング調査を実施し、委員会での討議では、②についても意見交換を行った。委員会メンバーは、委員長と当法人理事長を除き、団塊ジュニア世代以降の若い世代で構成したことから、まさに自分たちの問題として、これらのテーマで活発な意見が交わされた。この委員会での討議が、フォーラムの企画へと反映されていくことになった。

2. 住民意識ヒアリング調査

現役世代を中心とした住民意識ヒアリング調査では、全国から偏りがないよう4地区を選定、各地区50人合計200人（サンプル）を目標として取り組んだ。事業が2次募集（追加公募）であったこと、候補対象自治体の1つで、担当部署の了解を得るのに時間がかかったことから実査期間に影響し、目標数まで到達しない地区もあった。結果として、4地区合計198サンプル（有効サンプル数・事後に対象外と判明したサンプルを除く）回収した。

本調査では、現役世代の意識・行動にいくつかの知見が得られたが（第2章）、その中でも特に今回の問題意識に深く関わるものとしては

- 若い世代においても子どもを介した地域活動（子ども会や育成会、お祭り）には地

域を問わず、かなり参加していること

○活動参加経験を持つ人は義務的参加であっても、交流・交友の幅が広がる点を評価していることが多いこと

○ただし子どもが成長して卒業してしまうと、地域との関係や、それまでつながりを持っていた親同士の交流も途切れてしまう傾向があること

○今は仕事や子育てで忙しいが将来時間ができたときに、自分からは動かないが、依頼されれば地域のために活動するのは前向き（受動的活動意思）な人が多いこと
以上のような点が確認できた。

調査方法に機縁法を用いていることから対象にある程度の偏りも想定されるが、委員会の場においても、上に挙げた項目は同年代の委員の目からみて、世代の代表的な意見であろうという点で一致を見た。

子ども卒業後の親同士のつながりや地域とのつながりをどう維持していくか、将来、この世代に活動協力をよびかけるときの経路や方法など、地域づくりの視点で見たときの課題は残っているが、現役世代が高齢になった将来を考えても、地域活動・支え合い活動を支援していくという方向性自体は、否定される結果ではなかった。

3. 委員会の議論からフォーラムへ

問題意識の②に関して、委員会での将来の地域における支え合いの形を模索する議論のなかで、生活支援コーディネーターとして長く地域で活動してきた委員から、介護を含めた各種サービスが撤退・減少していく（自らの地域の）環境下、住民を軸にして介護保険を活用しながら新しい支え合いの形の構築＝共同組合方式が提言された。この提言（参考資料：フォーラム当日資料第2セッション：淡路市社協・岩城氏の資料参照）は、地域の環境分析から結論に収斂するまでの過程について、かなりの完成度を持っており、全国の生活支援体制整備担当者に知ってもらって自分の地域を考える参考にしてもらおうと、フォーラムの企画に取り込んだ。提言の全国への平行展開の提案ではなく、考え方・視点の提供という意図である。この際、地域の支え合いの仕組み化を実際に取り組んでいるRMOの活動も併せて提示し、提言が絵空事ではないことを参加者に実感できるよう工夫を加えた。

さらにフォーラムでは、①の問題意識とも関連するが、若い世代が地域の支え合いを知らない、意識する機会がないという危惧に対し、高齢者を含めた地域が、若い世代を支援するような取り組みが普遍的に展開されれば、そのような状況を解消していく一助になりえるという観点から、高齢者・地域が、子ども・子育てママ・若者を支援している取組みの紹介も行った。これらの事例は、高齢者の就労的活動支援という側面を持つ点でも、生活支援体制整備（又は総合事業）との親和性は高いと考えられる。

フォーラムにおいては、厚生労働省担当者を含めた登壇者同士の活発な意見交換が

交わされ、その過程で、「生活支援体制整備事業での多世代交流型の活動を許容せず、高齢者のみが参加する支援の形にはめ込むことを指示してくる市町村担当者の存在」や（多世代交流において）「高齢者が若い世代の支援者となり、高齢者の役割創出・生きがいにつながり、若い世代には、高齢者・他人に頼ってもいいんだという互助の感覚を呼び起こす契機となる」、「高齢者のみが幸せになるような地域はありえない」ことなどが事例を基に指摘され、参加者の共感を呼んでいた。（ZOOM のチャット、Q&A 機能による）

結果として、本事業の問題意識を盛り込んだフォーラムは、参加者アンケートにより、5 点満点評価で平均評点 4.6 を示し、生活支援体制整備事業関係者を中心とする視聴者から高い評価を受けた。

4. 地域の持続可能性を見据える生活支援コーディネーターの視点

今回の研究事業における委員会とフォーラムの議論のなかで、現状の生活支援コーディネーターの問題点、将来を見据えて改善しなければいけない点がいくつも挙げられたが、集約すると、以下の 2 点になるものと考えられる。

1) 長期的視点の欠如、長期的視点を持つ必要性

ひとつには、SC が目の前の業務の対応ばかりに追われていて、長期的視点で担当地域を見ていない、という点である。1 層 Co であれば自治体、2 層 Co であれば担当地区ということになる。集い場をいくつ作るかに気をとられ、何のための集い場づくりか、他に代わる方法はないのか、本当に必要とされているのか、などに考えが及ばない。現役 SC の委員からは、行政の生活支援体制整備担当者は 2～3 年で確実に代わっていくが、SC はもっと長期に渡って担当する可能性も高い、であれば介護保険計画や地域福祉計画なども、地域（自治体現場）がわかっているはずの 1 層 SC がもっと中心になって、今後を考えていくべきだという指摘があった。計画づくりに携われば、地域や生活に必要なもの、サービスは何か、確保できるのか、できなければどうするかなどを考えざるを得ないということである。実際にどの程度関われるかは、自治体の考え方もあるだろうが、極めて正論と言えるだろう。また、長期的視点を持たないと、同じ業務をルーティン的に繰り返す状況に陥る可能性も高い。今後、新たに高齢者になっていく世代が、これまでの高齢世代とは異なる考え方やライフスタイル志向を持つ可能性が多分にあるなか、重要な問題提起と言えるだろう。また、SC だけではなく、市町村の生活支援体制整備担当者を含めた地域支援職全体に係る課題でもある。

2) 狭い「高齢者支援」に囚われない

これは、2つの意味を指している。ひとつは、高齢者＝支援を受ける人、という観念にとらわれていてはいけない、ということ。実際には、SCだけでなく、保健師や地域包括の職員等にも見られる問題傾向である。このような考え方を基本にしていると、高齢者を活動者として見なくなり、就労的活動支援や役割創出、活躍支援などの発想に繋がりにくくなる。東京大学の研究からも、フレイルと社会性の関係は、フレイル低下が社会性の低下を招いているのではなく、社会性の低下がフレイルを誘発していることが示されており、身体面からも、高齢者の生きがい・精神面からも、高齢者ができる範囲での役割創出・活躍支援は重要である。高齢者は支援されるだけでなく、持てる力で状況により支援する側になってもらうという認識が必須という指摘である。

もう1つは、高齢者「だけ」でないと支援対象にならないという縦割り発想の問題である。場に高齢者以外の地域の人が混じっているという考え方で、多世代交流事業は生活支援体制整備の対象にならないという理屈が展開される。このような自治体担当者の話は、ときどき耳にすることがあり、フォーラムにおいてもまさに議論に上っていた。地域共生社会を謳い、多世代の協働を要請しながら、このような姿勢を取ることは本末転倒とも言え、地域の理解を得にくいだけでなく、若い納税者からの心情的理解も遠ざけるのではないだろうか。これは、介護保険財源を高齢者以外の支援に使え、という議論ではないことに自治体担当者は留意する必要がある。地域づくり支援なのに、地域を分断してどうする、という話である。今回事業の問題意識として挙げていたように、現在の若い世代は互助の実感、地域活動の必要性の認識から遠ざかっているという危惧があるなか、世代の分断をすすめる方向に寄与するようなことは、地域コミュニティの持続可能性を棄損し、ひいては生活支援体制の基盤を損なう恐れが多分にあることを、今一度考える必要があるだろう。

集約すると、以上の2つの点が、本事業の展開のなかで、今後の生活支援体制整備事業をすすめていくうえでの生活支援コーディネーターに求められている視点・視座として指摘されたポイントである。これらの論点をもとに、今後どのような活動に取組んでいくべきか、フォーラムで紹介したような活動・提言も含めて、各現場での議論を期待したいところである。また当法人としても、本事業の成果を踏まえて、同様なテーマでの議論の場を提供していきたい。

■■■■■ 参 考 資 料 ■■■■■

- ヒアリング調査回答例
- フォーラム告知チラシ
- フォーラム当日資料

現役世代ヒアリング調査・分類回答例

【 各分類項目別・具体的回答発言 】

Q1. 地域定住意向

○定住意向（これからこの地域に住み続ける）

「住み続ける。持ち家だから。環境が良いし、自然が良い」（30代女性）

「この地区にずっと住みたい。ほかの地区より便利だから。ここはスーパー、ドラッグストア、ホームセンター、駅、病院、役場、なんでもそろっている。高齢になったときも、ここなら暮らしやすい。」（30代男性）

○非定住意向（住み続けるつもりはない）

「住み続けたいとは思わない。愛着があるわけでない。もっと子育ての環境が充実した市町村に移り住みたい。親がいて、仕事があるから、住んでいるだけ」（30代女性）

「ない。実家に戻る意思がある」（50代男性）

○他（こだわらない等）

「完全移住ではなく、2拠点居住を考えている。関西地方出身だが、そっちとここと、1年のうち半分くらいずつを過ごすイメージ。」（20代女性）

「このまま住み続けてもいいかな、とも思うが、以前暮らしていた夫の実家に戻るかも知れない。私はどちらでもいい」（50代女性）

Q2. 近隣付き合い

○ない

「挨拶もないかな」（10代女性）

「顔見知りがない」（30代女性）

○挨拶程度

「特別なことは特にならない。顔見知りに会えば、あいさつする程度」（40代男性）

「挨拶程度。両隣以外、よくわからない」（30代女性）

○立ち話

「会えばあいさつを交わしたり、ちょっと立ち話するくらい。10軒くらいとはなんとなく親しく会話ができる感じ」（40代男性）

「挨拶程度。子どもがいる人（同年代）とは、話をするけど」（40代女性）

○それ以上

「近所付き合いは活発。20～30軒のくらいの範囲。雪が降ったりすると、除雪はみんなで助け合っている。会えば必ずあいさつする。おすそ分けも結構ある。一人暮らしの高齢者を周囲が何となく見守っている」（50代男性）

「畑を借りて野菜づくりをしていて、その家族や周囲の人たちとはよく顔を合わせている。

野菜や手料理のおすそ分けもしょっちゅうある。関東地方で 10 年ほど暮らしたが、その頃とは比べものにならないくらい、つながりが豊かになった。どんどん広がっていく感じ」(40 代女性)

Q3. 地縁活動

○参加

「おやじの会（に参加）。今も続けている。（こういう活動は）必要だが全員がする必要はない」(50 代男性)

「町内会、商店街の青年部組織、祭りの実行委員会などに長く関わってきた。これらの代表を務めたこともある。何かの役を一つやると次々に別の役もやってくれと頼まれるようになった。少し前から役を若手に譲るよう心掛けている」(50 代男性)

○義務的参加

「町内会組長持ち回り。組長が、神社掃除や広報誌配りなど担当」(40 代女性)

「育成会の会長をしている。育成会は子どもが小学 1 年生になると入会するのが慣習。育成会の活動は正直、負担が大きい。特に役をやっていると。会長なので仕方なく、消極的に参加している感じ」(40 代女性)

○経験なし

「ない。関りがない」(30 代女性)

「マンションそのものが地元の自治会に入っていないらしい。一軒家が新しく建ったときには、地元の自治会役員が加入を勧めに来るようだが、マンションは放っておかれている。声を掛けてもらえれば、加入しやすいと思うのに。」(20 代女性)

Q4. 志縁活動

○参加継続

「趣味でバンド活動をやっている。ロックバンドでエレキベース担当。高校時代から 30 年以上。若い頃はライブ演奏とかもやったが、今は忙しくてライブはやっていない。コロナでなおさらやらなくなった。仲間が集まって練習するのは 3 か月に 1 回くらい」(40 代男性)

「地区のソフトボールチームに参加。週 1 回練習会。子ども向けの読み聞かせの会にも所属。どちらも楽しい。楽しいから続けている。やめたら地域に関わる手がかりがなくなってしまう」(50 代女性)

○過去経験

「移住してからは特にない。以前は仲間とボードゲームのサークルをつくっていた。あとは、釣りが趣味。こちらでもそういう趣味の仲間ができればいいなと思っている」(20 代男性)

「今は何もしていない。以前ダンスをやっていた。子どもたちにダンスを教える教室とか、子どもと一緒にダンスを楽しめるサークルがあれば参加したい」(20 代女性)

○経験なし

「関心はある。参加する時間がない」(50代女性)

「いまはやっていない。子どもに手が掛からなくなったら、テニスか、何かスポーツのサークルに入りたい」(30代女性)

Q5. 高齢時生活像

○具体的活動

「高齢になったらいまの店を畳んで、同じ町内の別の場所に飲食店を開きたい。居酒屋兼定食屋。親しい仲間が集う地域居酒屋、地域食堂にしたい」(50代男性)

「実家で自給自足生活」(50代男性)

○家族・友人と

「植栽管理のボランティアは80代の人もある。楽しそうに活動している。自分もそんなふうに、仲間と一緒に地域の活動ができればいい」(40代男性)

「仲間と集まってお話しできる場所があればいい。若い人ともお話ししたい。そういう場所があればいい」(10代女性)

○元気・健康

「できる限り健康で。健康寿命を大事に。そのために、ウォーキングをやっている。自分のことは自分でやるように」(40代女性)

「足腰元気で楽しく」(50代男性)

○余裕・のんびり・趣味

「生活に困らず平穏に暮らしたい」(40代女性)

「多くは望まない。穏やかに、平穏に、健康的に暮らせればいい」(40代男性)

○働きたい

「70代までは、定年退職後も経験を生かしてどこかで働かせてもらいたい。趣味や娯楽の活動をするより、働いていたい。仕事をしているほうが楽しい。家でぼーっとしているのはいやだ。体が動く限り働きたい」(40代男性)

「働いていたい。この店を守っていききたい。夫が退職したら、二人で店をやっていけたらいい」(40代女性)

○施設

「老人ホームに入ることになるだろうと思う。ホームでも子どもや若者と交流できるといい」(40代男性)

「施設に入って、楽にすごしたい」(20代男性)

○利便性の高い地域

「平地で平屋の家になりたい。スーパーや駅が近いところで暮らす」(50代男性)

「歩いて行ける範囲にスーパーがある。私が高齢になっても、そのスーパーがあればいいなと思う」(20代女性)

○ほか

「昔には、町内で長老と呼ばれるような（目されるような）人たちがいた。どこかで、自分もそういう人たちのように、地域を引っ張っていく人になれば、と考えているのかも」（50代男性）

『30年後の自分自身』の目標として、いきいきと考え行動する、というのを掲げている。この具体像について、最近すごく考えている。親から植えつけられた「こうあらねばならぬ」という人生モデルを取っ払ってみたい。これまでの生き方をいったん清算してみたい」（50代男性）

○思いつかない

<略>

Q6. 体弱ったとき

○家族（配偶者、子）に

「夫婦で助けあって、何とかやっていけばいいと思う。場合によっては子どもにも頼らないといけないかもしれない」（40代女性）

「施設には入りたくない。妻に助けてもらおう。妻は介護福祉士っていうのか、介護業界で働いているから」（50代男性）

○家族＋地域

「いま自分がしているように、いまの小学生や中学生、大学生が大人になったときに、高齢になった自分の、ちょっとした困りごとなんかを手助けしてくれるといいなと思う。近所には、高齢者のゴミ出しを手伝うような子が結構いる」（50代男性）

「家族に頼る。それと、地域のコミュニティのなかで、ちょっと話を聞いてくれたり、ちょっとした困りごとを助けてくれるとか、そういう支援があればいい」（40代女性）

○家族＋サービス

「子ども、特に娘に助けてもらおう。必要に応じてヘルパーも頼む」（50代女性）

「家族に助けられながら、サービスも活用。地域で暮らしたい。最終的には施設入所」（40代女性）

○サービス

「サービスを使いながら地域で暮らす。極力子どもの世話にならないようにしたい」（30代女性）

「公的なサービスを使う。娘がいるが、介護を頼ることはしたくない。お金のことで多少頼ることがあるかもしれないが」（60代女性）

○施設

「お金ためて、施設に。ただ、今は子どもにお金がかかるので、まだ本気で考えられない」（50代女性）

「お金があれば高級な介護付き施設で暮らしたい」（40代女性）

○行政・地域包括に相談

「何とかセンター（地域包括支援センター）に相談するしかない。ただ、自分の体の状態は自分が一番よくわかると思っている。専門家に施設に入れと言われても、自分はまだ家にいられると思えば家にいる」（60代男性）

「一人暮らしなので、介護や福祉の相談窓口に行く」（40代男性）

○家で暮らしたい（具体的な方法がないか、何にも頼らず家で暮らす回答）

「できれば家にいたい」（40代男性）

「動けなくなったらそれでおわりでいい。ヘルパーは利用せず、施設に入らず、最期まで家で暮らす。周囲の人たち、近所の住民とは協力し合って暮らしたい」（20代女性）

○その他

「その時の最善の方法で。家族でもサービスでもいい」（30代女性）

「特養に入りたいと思うけど、簡単に入れないと聞いている。私たちのときに、入れる枠があるのだろうか。費用も1,000万とか準備しないと、と言われたが、用意できない。お金がないと、夫にみてもらうしかない」（40代女性）

Q7. 理想地域像

○友達・地域と、コミュニケーション・支え合い

「同年代の友人同士で、お互いの暮らしぶりをさりげなく見守ったり見守られたりできればいいと思う」（30代女性）

「今住んでいる町内では、住民同士がよく助け合っている。雪が降れば、一人暮らしのお年寄りの家の前を若い人が雪かきしている。具合の悪い人がいれば、車に乗せて病院に連れて行ってあげる。離れて暮らす娘や息子の連絡先を知っていて、すぐ知らせる。私が高齢になったときにも、こんな助け合いがあればいい」（50代女性）

○子ども・高齢者・障害者に優しい

「認知症になっても、周囲の人たちが認知症の症状などを理解していて、気遣ってくれるような地域になってほしい。認知の人やその家族がイヤな思いをすることのないように」（60代女性）

「高齢者より子どもに優しいまちであって欲しい」（40代男性）

○居場所がある

「この地区は、高齢者向けのサークルとか、〇〇センターとか、高齢者が集まれる場所が結構あると思う。将来的にもそうであればいい」（40代女性）

「誰もが学校に行くように、高齢者の人も全員がいけるような場所が（国が）作ればいい」（10代男性）

○交通の便、交通支援

「バスやタクシーが使いやすい」（40代女性）

「買物とかが（自分で車がなくても）できるような。配達で気軽に頼めるのがあればいいけど、直接選んで買物できる仕組み（送迎とか）の方がいい」（30代女性）

○買物・病院・インフラ

「スーパーは生活するうえで大事。図書館が遠いので、高齢になって時間をつかえる場所がほしい」(50代女性)

「医療・買い物にすぐ手が届く環境」(40代女性)

○活気のある地域

「ここは高齢化と出生率の低下が進んでいる。若い世代、子育て世代が増えてほしい。寂れていかないように。」(50代女性)

「高齢化が進んでいるが、うまく世代交代が進んで若い住民が増えてほしい」(40代男性)

○その他

「地域に対して望むことは特にない。地域といっても、住民同士では結構もめ事も多く、安易に頼れないと思っている」(40代女性)

「現在行われている、昔から続いてきたお祭りなどの行事が、この先も守り継がれるといいなと思う」(40代男性)

○今のままでよい

「今のままで良い。特に不満ない」(30代女性)

○思いつかない

<略>

Q7 - 1. 理想実現の方法

○地域の取り組み・意識

「実際は難しいだろう。まずは地域のつながりを、お祭りとかイベントを生かして、世代を越えてつくっていくことが大事だろう」(40代男性)

「行政や社協は、多世代が一つのテーマについて話し合う枠組みを整える、話し合って実践するのは我々地域住民ということにしないといけない」(50代男性)

「高齢でも家で暮らし続けるために、住民が協力し合う、その気持ちが大事。気持ちを共有できる人たちが集まれば、できることもある」(20代女性)

○社会全体の教育・意識

「無理解や無関心をなくすには、教育が大事。知識を持ってもらうこと」(60代女性)

「直接的な答えじゃないのかもしれないけど、少子高齢化のなか、教育が大事ななんだろう。子どもの心の育成の方向性」(50代男性)

○行政・議員

「老人会とか地域の組織が機能しなくなっている。市の人(公務員)が、そういう組織をお世話して継続してほしい。(地域ではない)第3者の方が、意見などもめないのではないか」(40代女性)

「選挙で言っている人(公約)もいるが、県会議員等の人にしっかりやってほしい。」(50代女性)

○企業・事業所

「〇〇駅前行きじゃなくても、▲▲駅方向にでも（バス等）出てくれれば。ある程度の便数（1時間2本くらい）が必要。行政ではなく、大型SC等で送迎等出してくれても」（50代女性）

「介護サービスを利用するようになったとき、介護施設が高齢者を囲い込まないようにしてほしい。ケアマネが自分の施設に囲い込んだりするの、やめてほしい」（40代女性）

○官民の連携（行政も住民・事業所も）

「公共福祉の充実が大事。地域住民・企業・行政みんなが関係強化すれば実現可能」（40代男性）

「サロンや交流イベントが活発であってほしい。そのための活動資金は、行政や地元企業がバックアップしてほしい」（50代女性）

○既にあるものを工夫・展開

「やってくれているところもあるようなので、こちらでもやってくれれば」（30代女性）

「既に周回バスはある（隣の地区まできている）ので、ルートさえ考えてもらえれば」（40代女性）

○技術的進歩・活用

「ネットスーパー。無人・自動運転の車の活用」（40代女性）

「webサービスの充実」（30代女性）

○あるところに移る・引っ越す

「引っ越しの前提となった利便性がなくなれば、別の地区に引っ越す。この地区にしがらみは何もない」（40代男性）

「自分ではどうにもならない。引っ越すくらいしか浮かばない」（30代女性）

7

○ほか

「過疎地域では無理なので、それなりの人口がいないと難しいかな。〇〇市とか▲▲くらいの規模なら」（40代女性）

「若いうち、アタマがしっかりしているうちに、高齢になったときにどうしたいかを考えて、準備しておくのが大事だと思う」（40代女性）

○わからない・どうすればよいのだろう

<略>

Q7 - 2. 活動参加意向

○能動的活動意思

「子どもには児童館、高齢者には介護予防サロン、ではなくて、誰でも行ける場がいい。一緒に過ごせるようにすればいい。スーパーにそういうスペースをつくるのもいいし、人が集まる場所で交流や相談ができればいい。つながりづくりの場。自分でつくってみたいし、つくりたいという人がいれば協力したい」（50代女性）

「地域の動いている役員にはありがたいといつも思っている。自分も動く」（40代女性）

「中学生の頃に、地域おこしを目的に映画をつくったり、イベントでの出しものをつくったりした。そういうプロジェクトを立ち上げて、シナリオをつくり、実行した。多くの人にこの町に興味を持ってもらって訪れる人を増やそうと。それがすごく楽しかった。たくさんの人に喜んでもらえた。同じように、みんなが気軽に集まってお話しできる場所をつくりたい」(10代女性)

「誰でも気軽に来られる集いの場をつくれるなら、つくりたい。そういう立場ではないし、どうやってつくればいいのかもわからないが。まずは身近なところからつながりをつくって、広げていきたい」(20代男性)

○受動的活動意思

＜報告書第2章ヒアリング調査結果19頁参照＞

○意思なし・わからない

「何かが必要だと思っても、行動を起こせるか、分からない。悩ましい」(40代女性)

「自分で何かしようとは思わない。目立ちたくない。何かの活動に誘われたらどうするか、そのときに考える」(50代女性)

「自分が何かしようとは思わない。そもそも何をすればいいのかわからない」(40代女性)

以上



そろそろ2040年の話をしようか？

～多世代での共働と持続可能な地域の姿とは～

参加費
無料！

少子高齢化・人口減少を背景に、地域における生活支援・介護予防の維持・充実をはかっていくためには、地域住民を含めた多様な主体が地域づくりの担い手として地域包括ケアシステムの構築に参画していくことが不可欠であり、その活動をコーディネートする生活支援体制整備事業を地域の中で適切にワークさせていくことが重要になります。

このフォーラムでは、多世代・多様な視点から、未来（2040年）に向けて、変化していく今後の多様な価値観・世代により地域活動を展開・支援を行っていくにあたっての課題を考えます。

令和6年
2月22日 木
13:30～16:30
Zoom 開催

対象：生活支援体制整備事業関係者、
生活支援コーディネーター、
地域福祉関係者、ほか...

開催内容

13:30 開会

13:35 基調講演『2040年（20年後）に向けて』

～地域づくりや互助は、地域の意識はどう変わるか、生活支援体制整備は～
・東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授 高橋 誠一 氏

13:45 『未来（2040年）に向けて～若い世代への支援・多世代交流～』

- ・一般社団法人 ママのHOTステーション 代表理事 倉嶋 香菜子 氏〈ママ支援&世代交流〉
- ・特定非営利活動法人 きらりよしじまネットワーク 事務局長 高橋 由和 氏〈子供支援&世代交流〉
- ・厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進室 室長補佐 岸 英二 氏〈コメンテーター〉ほか...

15:15 『未来に向けた私の提言～自分の地域を考えた～』

- ・社会福祉法人 淡路市社会福祉協議会 事務局次長 岩城 和志 氏
- ・特定非営利活動法人 きらりよしじまネットワーク 事務局長 高橋 由和 氏

16:25 質疑応答

16:30 閉会



開催日時 2024 年 2 月 22 日 (木) 13:30~16:30

申込方法 メール又は FAX にてお申し込みください。

MAIL：所属先、役職名、氏名、E-mail アドレス、電話番号をご記載の上、
下記のアドレスにてお申し込みください。

yanata@clc-japan.com

お申し込み確認のメールを後日お送りいたします。

確認メールが届かない場合はお手数をおかけ致しますが電話にてお問い合わせ
ください。

FAX：下記の FAX 申込書にてお申し込みください。

※同じ所属先で複数人でお申し込みの際は、全員の所属・役職・お名前を
ご記入ください。

参加方法 開催 1 週間前を目安に、ご登録のメールアドレス宛に ZOOM 入室 URL 等の
情報と当日資料をご案内します。当日はネット環境を整えてご参加ください。

申込締切 2024 年 2 月 13 日 (火)

お問い合わせ 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)

〒981-0932

宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1 階

TEL:022-727-8730 FAX:022-727-8737

E-Mail:yanata@clc-japan.com

担当：築田 (やなた)・田所



【FAX 申込書】FAX: 022-727-8737

所属

役職

フリガナ

氏名

E-mail

TEL

FAX

受付が完了しましたらメールにてご案内させていただきます。

そろそろ2040年の話をしようか？

～多世代での共働と持続可能な地域の姿とは～

令和6年2月22日（木）

13:30～16:30

開催内容【プログラム】

13:30 開会

基調講演 『2040年（20年後）に向けて』

研究委員長

・東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授 高橋 誠一

セッション 『未来（2040年）に向けて～若い世代への支援・多世代交流～』

・株式会社 ママのHOTステーション 代表取締役 倉嶋 香菜子〈ママ支援&世代交流〉

・特定非営利活動法人 きらりよしじまネットワーク 事務局長 高橋 由和〈子供支援&世代交流〉

『未来に向けた私の提言～自分の地域を考えた～』

・淡路市社会福祉協議会 事務局次長 岩城 和志

・特定非営利活動法人 きらりよしじまネットワーク 事務局長 高橋 由和

【コメンテーター】

厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進室 室長補佐 岸 英二

関西学院大学 人間福祉学部 准教授 柴田 学

栃木市社会福祉協議会 地域福祉課 菅沼 裕子

特定非営利活動法人 くらしづくりネットワーク北芝 中村 雄介

（沖縄県）北谷町 福祉課 津波古 加津代

特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

質疑応答

※登壇者の発表についてご質問がある場合は Zoom チャットにて事務局宛にお名前、メールアドレスを添えてご連絡ください。

16:30 閉会

はじめよう！

ミライの
ために

そろそろ2040年の話をしようか？

～多世代での協働と持続可能な地域の姿とは～

東北福祉大学

高橋誠一

なぜ2040年、15年後か

- 『2015年の高齢者介護』
 - 団塊の世代が65歳以上に
- 2025年 地域包括ケアの目標年度
 - 団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される体制(地域包括ケアシステム)の構築を実現。
- 2040年 **ポスト地域包括ケア**の目標年度？
 - 団塊ジュニアが65歳以上に
- あたかも「団塊世代」の問題のように言われてきたが……
- 2040年は、この延長線上にあるのだろうか

地域共生社会とは

地域包括ケアシステムの上位概念
包括的支援体制

- 多様性の尊重
- 気にかける関係性

ひとり一人の暮らし

- 活躍の場づくり
- 安心感のある暮らし

誰もが役割を持てる地域共生社会

- 働き手の創出
- 地域資源の有効活用



様々な社会・経済活動

- 就労や社会参加の機会の提供
- 民間企業による生活支援への参入

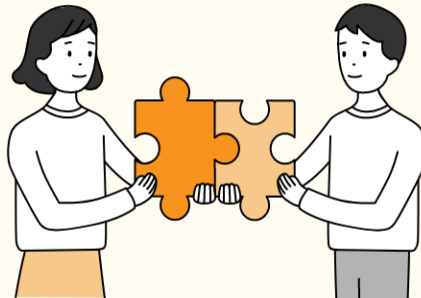
厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/>

地域共生社会の実現に向けた取組の経緯

人と人とのつながりそのものがセーフティネット

地域住民の
気にかける
関係性

つながり・支え合い



専門職による
伴走型の支援

寄り添い型の支援



厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/>

で、今日はどんな話？

- 「変化していく高齢者像を見据えた地域住民が支え合う地域づくり推進のための生活支援コーディネーターに求められる機能に関する調査研究」
 - ・ 厚生労働省令和5年度老人保健健康増進等事業
 - そこで、思いっきり視点を変えてみたら、こんなセッションになりました
1. 「2040年・未来に向けて ～若い世代への支援・多世代交流～」
 2. 「未来に向けた私の提言 ～自分の地域を考えた～」
- 今日は、先入観、前提に囚われない話になるかも

「地域が繋がるHOTな拠点」 ママのHOTステーション



一般社団法人 ママのHOTステーション
代表 倉嶋 香菜子



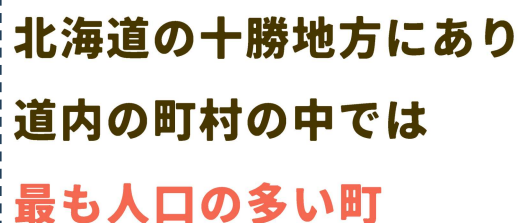
自己紹介

- 2020年3月 コロナが日本で流行り出したときに大阪から上士幌に移住
→ すぐに緊急事態宣言となる。
- 2020年4月 地域おこし協力隊としてまちづくり会社に配属
→ 生活支援コーディネーターを任される
- 2020年7月 ママのHOTステーションを立ち上げ、
ママの居場所づくりと多世代交流の場づくりを始める。
- 2022年4月 独立し、ママのHOTステーションを継続
高齢者活躍にも繋がる「ベビチア(赤ちゃん応援隊)」を始める。
- 2024年1月 拠点を音更町に移し、株式会社ママのHOTステーションを設立。
地域を越えて、ママ、赤ちゃん、高齢者の方々の憩いの場を提供している。



くらしま かなこ

(保有資格：保育士、介護支援専門員資格)



(2050年には**45.5%**の見込み)



同世代の集まりだけでいい??



高齢者ばかりの集まりは
苦手じゃあ...
もっと自由なのが
いいんじゃあ...

わたし、苦手な人が
いるのよ~
あんまり大勢で集まるの
も得意じゃなくて...



同世代の集まりだけでいい??



どうしよう
ちょっとだけ子ども見てて
ほしいな...

でもママ友には
お願いしにくいな...

実家が遠いから
いつも一人で育児...
周りのママ達見てたら
キラキラしててなんだか
悲しくなってしまう...



ウェルビーイングの視点

高齢者と産後ママ世代の交流は、社会全体にとって重要な側面を持っている。

なぜなら両者ともに「孤独」という課題を持っており

その課題は単なる交流イベントでは解決されない。

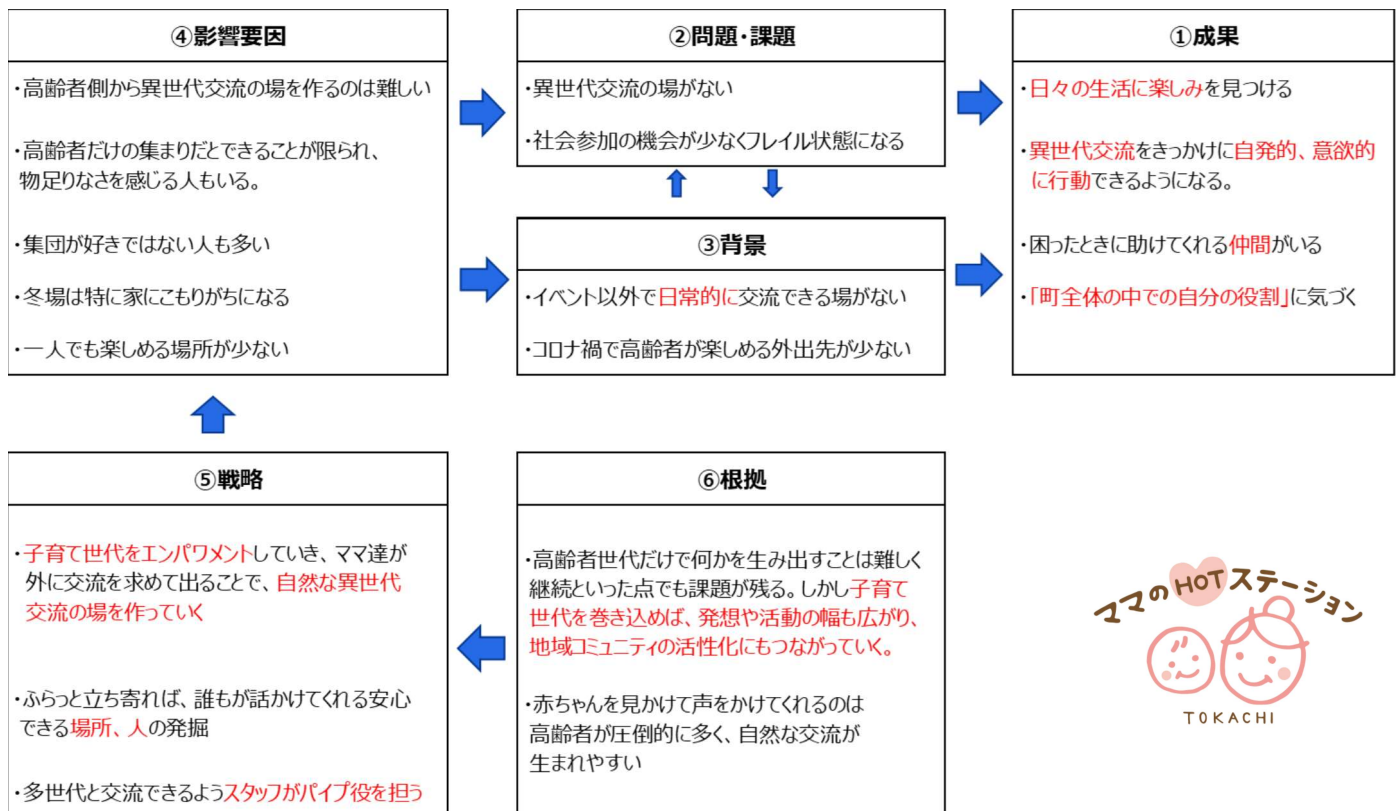
継続的(持続的)な交流が生きていく上での「安心」に繋がり、

それがきっかけで

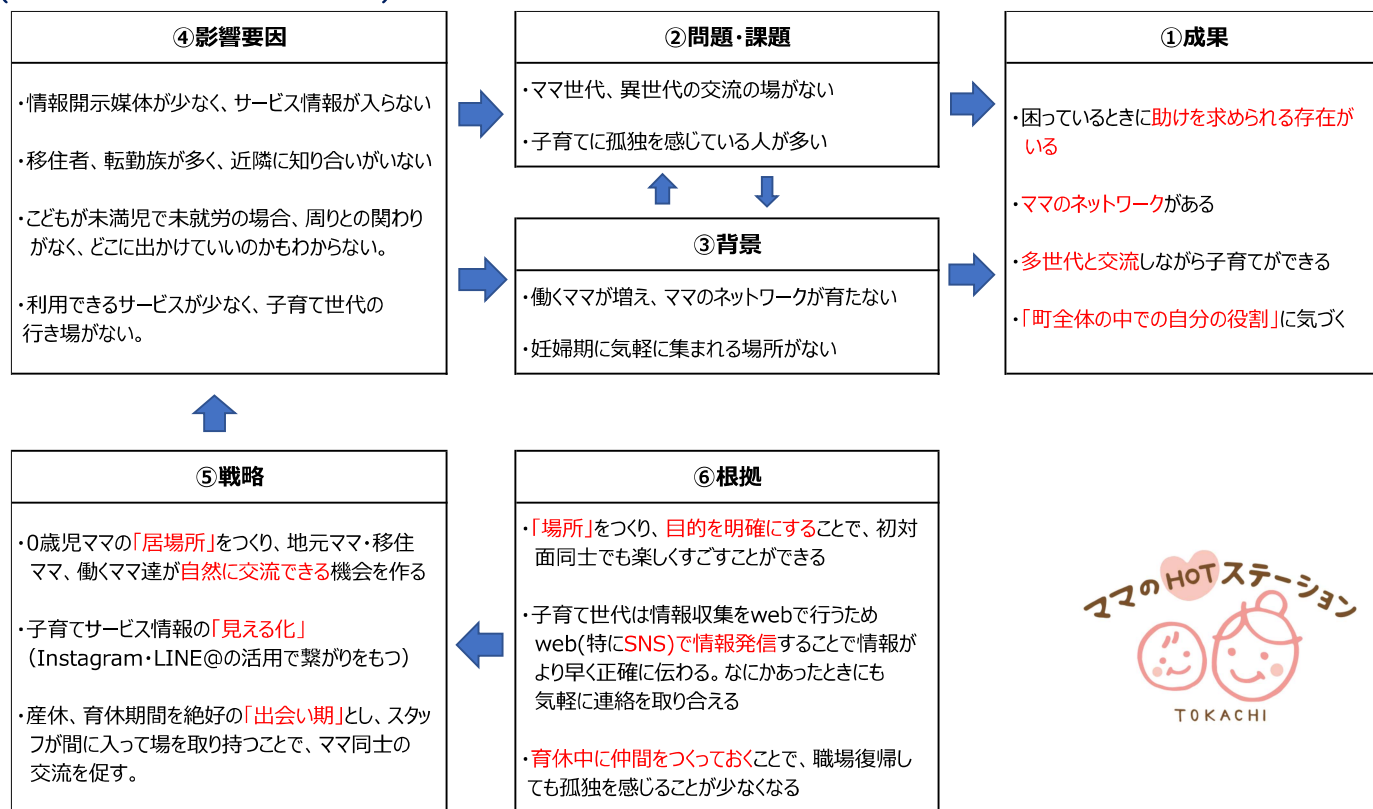
「生きる意欲」「エンパワメント」に繋がっていく。



(エンパワメント支援設計・高齢者)



(エンパワメント支援設計・ママ)



第一段階

ママ世代の 居場所づくり





コンセプト

ママがホッとできる居場所

- 気軽に雑談できる場所
- 世代交流できる場所

巻き込み型の 活動展開

ママコミュニティ

■ 雑談から「相談」が生まれ、相談から「仲間・自信・笑顔」が生まれます。



多世代交流

■ 高齢者向け体操教室の横でHOTステーションを開催し、自然な交流に繋がります。



あかちゃん便り作成

【1年目】



【2年目】



【3年目】



【4年目】



■ ママ紹介リレーでママを主役に

お便り配布

■ ヨチヨチ隊としてみんなで配布し、地域交流につなげる



【次のステップ】

高齢者の方々に活躍してもらおう

■ 顔馴染みが増えてきた段階で、赤ちゃんに関わりたい高齢者さんを募集！



赤ちゃん見守り隊として

地域の高齢者の方々のチカラを借りたい。

お孫さんとなかなか会えないなら

地域の赤ちゃんに触れ合ってもらいたい。

そして、地域が繋がってほしい。

地域で赤ちゃん和妈妈を応援するという意味で

cheer(応援)

というコトバを使いました。

上士幌
消防署



小児科のない町だからこそ、救急時の対応をみんなで学ぼう！



だけど赤ちゃん連れだと参加しにくい・・・



ベビチアさんに助けてもらおう！！

乳幼児救命講習実施 2日間で80名参加



■ ママ達が講習を受けている間、ベビチアさん達が赤ちゃんを見事に見守ってくれました



←当日の動画



講習のあと

「ありがとう」

の言葉がたくさん届きました。

救命士さんからの「ありがとう」

少しでもパパママが参加してよかった、
何か自分たちでもできることがあると
思ってもらえればと思っています。

今回、パパママが集中して講習を受講できる
体制を作っていただき本当に感謝しています。

地域の皆さんが一つになっていて
とてもやさしい空間でした。



ベビチアさんからの「ありがとう」

「本当に楽しかった。
こんな機会を
作ってくれて
ありがとう」



「50年ぶりに
赤ちゃんに触れ
たよ。幸せな
時間だった。
ありがとう」

ママのHOTステーションから ベビチアさんと救命士さんに「ありがとう」





ベビチアさんLINE



こんばんは!

ベビチアスタッフ
くらかな さま

75歳のベビチアさんから
届いたLINEメッセージ。

パパママ世代の頑張りにも
気付いてくださり、ご自身も
力になれたことでやりがいに
繋がっています。

これもエンパワメント。

お手紙 有り難うございます。📧
救急講習に参加させて頂き、可愛い可愛い赤
ちゃんにあえたことはもちろん、我が子のた
めにと こういう機会に参加される パパマ
マに拍手👏を贈りました。

可愛い赤ちゃんを抱っこさせて頂けることが
人助けになっていると思うと、私自身も嬉し
くおもいます。

繋いで下さる皆さんがいることで成り立って
います。頑張ってます!!

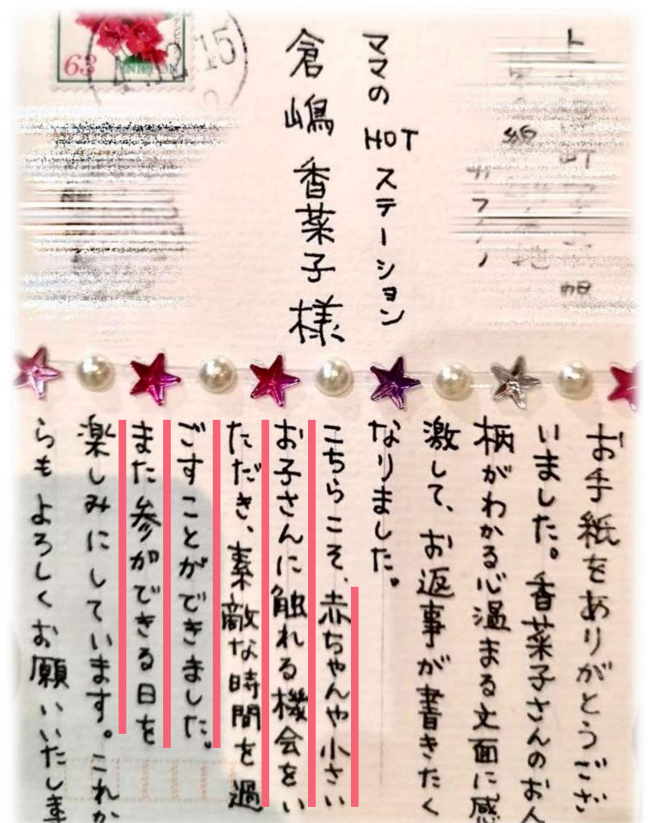
何かありましたら、声掛けください。
楽しみにしています。



お手紙で交流

手紙の返事を書き
ポストまでの道のりを
歩いてくださる。

これも「エンパワメント」



**菅前首相と北海道鈴木知事が
HOTステーションの視察に来てくださいました。**



当日(R5.02.18)の動画



2023夏 in 大阪



URさんにお声がけいただき、大阪でも開催！！

UR都市機構 × HOT In 大阪



- 上士幌HOTとモニター越しに交流
- 地域の高齢者さんも笑顔に



2024年

活動拠点を上士幌町から 30km離れた音更町に移す



音更町に拠点を移したらどうなったか？



音更町のママだけでなく、帯広市・上士幌町・士幌町・幕別町・足寄町
など近隣一体の地域からママ達が集まってくるように・・・

地域と世代を越えた交流が始まる



交流の様子①



町内の高齢者さん達が町内、町外の子ども達と触れあい、笑顔の輪が広がっています。

地域を限定しないことでママ達や高齢者さんの出会いの幅も広がっています。

そして…



交流の様子②



インスタで活動の様子をこまめに流すことで**パパの参加率が上がり**開催場所に併設されている就労支援の喫茶店のランチを毎回みんなで注文して食べるのが恒例に。ここにベビチアさんも入ります。

交流の様子 ③



上士幌在住の80代のベビチアさんとそのご主人(90代)のご自宅に本州から移住してきた親子が遊びに行っているときの動画です。血の繋がりはなくとも**地域の孫、地域のじいちゃんばあちゃん**がいれば、孤独や孤立は解消されていくのではないのでしょうか。

「場」がもたらす効果①

ただの「場」だと人は集まらない。

どんな「場」なのか(←コンセプト)
どんな「人」が集まるのか(←対象者)

を明確にすることで、そこに賛同する人達が集まる。

「場」に「人」が集まると「雑談」が生まれる。

「**雑談**」が人との距離を縮めてくれる。

「**雑談**」が世代の距離を縮めてくれる。

「**雑談**」が地域の距離を縮めてくれる。

「場」がもたらす効果②



- 「雑談」により「人・世代・地域」の距離が縮まる
- ママ世代が高齢者さんに声をかけて「場」に一緒に来る
(= 送迎サービスいらない)
- 病院やスーパーまで、ママ達が高齢者さんをついでに
乗せていってくれる。現地では別行動、行き帰りだけ一緒。
(= 無理のない助け合い、高齢者さんはおかずのおすそ分け)
- しばらく顔を見せない高齢者さんがいると、ママ達の間で
話題になり、誰かが見に行くようになる。
(= 自然に見守り体制ができている)



- 「高齢者」＝支援対象 「子育て世代」＝支援対象
という考え方だけでなく、互いの強みをマッチングする
という発想が必要。
- 行政だけで住民をすべてフォローするには
無理がある。官民それぞれ得意なことを実践し、
行政の苦手分野は民間に頼るべき。
- なにごとも世代で区切らない。同世代の交流も維持
しつつ、異世代とも交流できる場を行政は支援していく
べきではないか。
- 外出意欲は生きる力。
外出したいと思える地域づくりを！！

これからの地域づくりとは…



北海道十勝
ママのHOTステーション
代表：倉嶋 香菜子

ご清聴ありがとうございました。

高齢者も、働く世代も、若者も、赤ちゃんも、
障がいを持っている方でも、「繋がる」ことで
解決することがたくさんあると私は常々感じて
います。

だれもが尊重し合える未来づくりを
これからも考えていきたいと思います。



@HOT_STATION2020

「そろそろ2040年の話をしようか? ～多世代での協働と持続可能な地域の姿とは～」
生活支援体制整備事業関係者向けオンラインフォーラム 2024.2.22

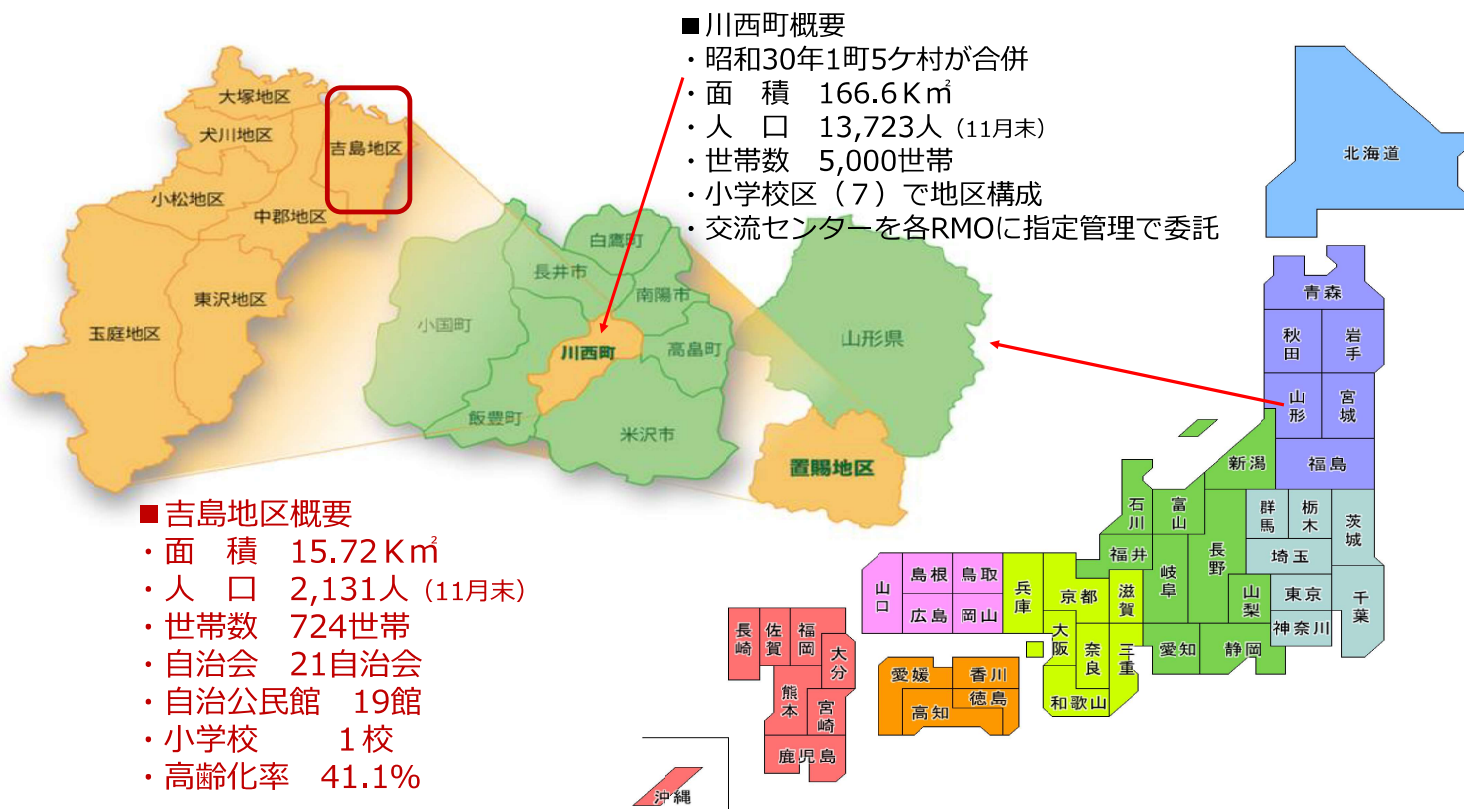
Session I

子どもの育ちを地域で応援するために

～ 今、求められる地域ぐるみの子育て支援とは～



特定非営利活動法人 きらりよじまネットワーク
事務局長 高橋由和



吉島地区第4次地区計画 令和4年度～令和8年度（5ヵ年間）

将来像

人が生まれ、育ち、笑顔とうるおいのある里
きりよしじまの創造

基本目標

誰一人取り残さない わがこと、まるごと
持続可能な地域づくり

テーマ

夢をつないで、さあこう 未来へ

自治部会 分野別目標 思い豊かに住み続けられる吉島 施策の柱 【1】住民参加による交流基盤の拡充 【2】地域資源を活かした地域内協働による産業の活性化 【3】住民の安全・安心の地域づくり	【1】行動領域 交流から生まれる移住、定住の促進 交流から生まれる新しい人のつながりを拡充 地域の住民相互の交流の活性化 地域づくりの当事者意識の醸成	【2】行動領域 商工団体、農業団体等と連携した 地域産業の活性化 新しい産業創造支援と仕事づくり	【3】行動領域 防災・防災意識の高揚と抑止力の強化 自治会活動の活性化
環境衛生部会 分野別目標 自然と人が共生する郷づくり 施策の柱 【1】燃やさない、捨てないよしじま 【2】環境にやさしいよしじま 【3】健康の里よしじま	【1】行動領域 野焼き・不法投棄の根絶 ごみ減量化と3Rの推進 環境保全の住民意識の高揚	【2】行動領域 環境保全活動の活性化 潤いのある空間づくり 環境保全型農業の推進	【3】行動領域 住民の元気づくり 食育と健康づくり
福祉部会 分野別目標 子どもからお年寄りまでがつながりあう吉島 施策の柱 【1】地域ぐるみの子育て支援 【2】みんなが見出す生きがいがづくり 【3】地域で暮らし続けるための生活支援	【1】行動領域 安全・安心な遊び場づくりの推進 共有環境づくりの推進 空下交の安全確保の推進 放課後学童保育の充実	【2】行動領域 介護予防と生きがいがづくりの推進 元気な高齢者や女性層の社会参加の推進 ボランティア育成と受け皿づくり	【3】行動領域 支え合いサポーター育成 高齢者の生活支援の推進
教育部会 分野別目標 共に学び 想いつながる生きがいがづくり 施策の柱 【1】地域リーダー育成と住民資質の向上 【2】元気なこころと体で生きがいを見出す生涯学習 【3】地域教育力の向上	【1】行動領域 地域のリーダー育成 学社連携と地域教育力の向上	【2】行動領域 社会教育事業の推進と学習拠点の拡充 伝統文化の継承 人材ネットワークづくりの推進 子どもから高齢者の居場所づくり スポーツを取り入れた暮らしの推進	【3】行動領域 安全と安心の居場所づくり 子育て広報活動の充実 住民参加の子育てプランの推進 声かけ運動の推進



2004～キッズジョブスクール（アフタースクール）

将来、生活困窮の若者をつくらないことを目的にスタート
地域内の事業所や商店など多様な主体が関わる



青少年健全育成事業



わんぱくキッズスクール

・食育
・コミュニケーション
・リーダー育成



【学びと遊びのバランスの重視】

勉強だけでなく、遊びや体験を通じて子どもたちの興味や才能を引き出す場を提供。学びと遊びのバランスが取れた環境は、子どもたちの創造性や好奇心を刺激する。
子どもたちが安心して遊べる公園や遊び場を整備することで、地域全体で子どもたちの安全を保障する。

中高生ボランティア



青年ボランティア



【地域のリーダーシップと参加】

成功している地域の先輩やボランティアをメンターとして子どもたちに張りつける仕組み。メンターは経験を共有し、子どもたちの悩みや困難を支援することで、自己肯定感や自己成長を促進。

メンターは地域で子どもたちや家族が参加できるイベントやプログラムを企画・運営に関わる。これにより、交流やコミュニケーションが促進され、子どもたちの社会性やコミュニケーション能力が育まれる。

学童保育（児童クラブきらり）

71人/88人（全校生徒）

1～6年生 2クラス制

19:00まで（第1・3・5土曜開所）

独自の放課後子ども教室を実施

支援員 7人（常勤1人・非常勤6人）

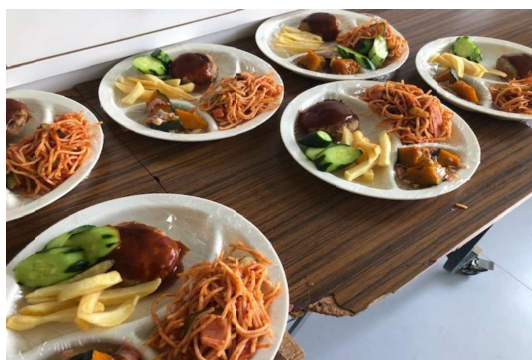
学習指導、習い事コースあり



【教育・保育環境の充実】

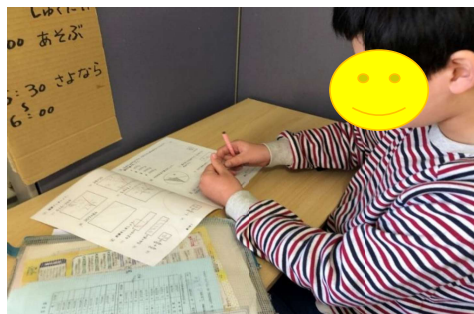
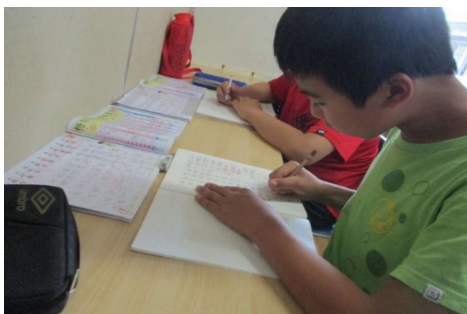
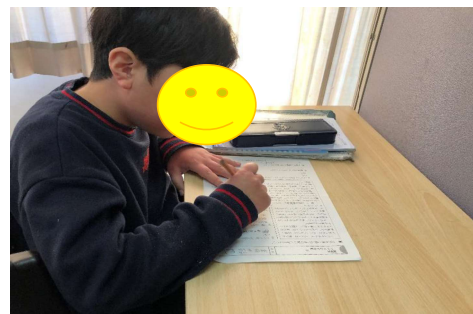
質の高い教育や保育環境の整備に住民が関わり、子どもたちの学びや成長をサポート。施設や教材、プログラムの充実を図ることで、子どもたちの能力を伸ばす手助けとなる。

おやつ、給食は手づくりで子ども食堂を兼ねる



感謝の気持ちを醸成
食材の学び

ハンデキャップがあってもみんなでサポート ⇒支援児童がいることは非日常ではない



【親のサポートプログラムの提供】

子育てがストレスや不安にならないよう、親をサポートするプログラム（学習と遊び）を提供。親の心のケアや育児の知識向上を支援することで、家庭環境をより安定させることができる。

学校との上手な連携のために

美郷幼稚園・吉島小学校・川西中学校
児童クラブきらり・きらりよしじま
合同連絡会議

【地域全体の協力体制の構築】

地域の住民、学校、保育園、地域団体、行政などが協力して子どもたちの育ちを支援する仕組み。
連携を強化し、お互いの役割や責任を共有することで、子どもたちに対するサポートがより効果的になる。

- 合同連絡会議による情報共有の場の設定
(互いのやれること、やれないことがわかっている)
- 学びづくりの場の設定 (学び創る側、受ける側への啓発と役割分担)
- 資源の共有、提供 (人材、備品、施設、情報や手法)
- 共通の教育テーマを持つ (SDGs)
- きらりからの事業委託 (保護者対象の家庭教育研修会の開催)



コミュニティスクールの両輪

2011～地域学校協働本部推進員の配置。
きらりよしじまの常勤職員として午前中は小学校に駐在。
午後からはきらりが経営する学童保育で勤務



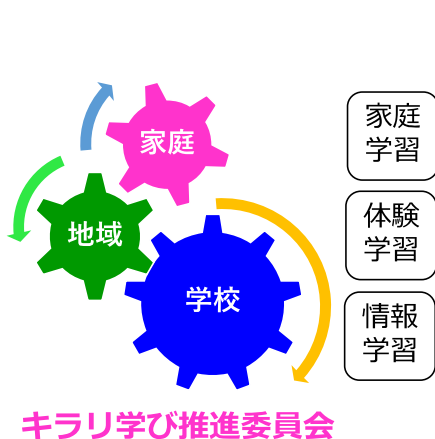
授業補助



学校ボランティア



地域福祉授業



家庭



←住民による編集作業



地域によるZoomでの沿革事業→



世の中には、いろいろな人が暮らしています。
住んでいる環境、家族が1ヵ月間に使えるお金、年齢、体の特徴など
それぞれ一人ひとりが違います。

「ふくし」とはいろいろな人のいろいろな

「ちがいを」認めながら、みんなが自分らしく、
いきいきと暮らしていくために

「ふだん」の「くらしを」「しあわせ」にすること。

話し合ってみよう！

①困っている人、助けが必要な人ってどんな人だろう？

②みなさんはどんなことができるだろう？

①

②



話し合ってみよう！

①親切にしてもらったり助けてもらって幸せだったこと

②だれかに親切にしたり助けあげて幸せだったこと

①

②



学校が
通いの場



よしじまっ子おはよう隊 2014～



ありがとね♡
元気だよ！

おはよう
ございます！
元気ですか♡

子どもたちも助け合いの一員
高齢者見守りに一役



キラリ掛け愛運動 2020～



生活支援

働き手の募集をお手伝いします

事業主様に代わって働き手を募集します！

人手が足りない、期間でアルバイトを雇いたい、田植えなど農業期を手伝って欲しいなど、働き手を募集されたい事業主や農家の皆様。きらりよるすねっとでは、広く働き手の募集をお手伝いいたします。詳しくは、...

2022年03月01日

支援会員登録フォーム

2022年02月14日

生活支援お助けチケット『たすけ愛きらり』

きらりよるすねっと

見たい内容を選んでください。

- 健康
- きらり便
- 防犯・防災
- 児童クラブ
- まんま屋産直
- 生活支援

よしじまの暮らし

吉島の暮らし お手玉で遊ぼう

子育てについて
お困りのこと、お悩みなどございましたら
お気軽にご連絡ください。

子育て相談フォーム

よしじまの農業と食

伝えたいよしじま 伝統野菜 #01 大根編

よしじまの歴史と地理

吉島にあったお城 洲島城

今のすがたを確認しよう

きらり便の利用方法

特定非営利活動法人きらりよしじまネットワークでは、川西町内で買い物に困難な地域の方のために、吉島地区商工会、各地区交流センターと連携して移動販売事業に取り組んでいます。ルートや日時を決めて週1回の...

2021年11月12日

地域ぐるみの子育て支援とは

連携と協力

子育て支援機関、学校、公民館（コミセン）、学童保育など、地域内のさまざまな組織や団体が協力して、子育て支援のプログラムや活動を計画・実施する。

情報提供

地域内で提供されている子育てに関する情報やサービスを保護者に対して提供する。
（行政との連携も必要）

交流の場の提供

公民館やコミセン、公園など、親同士や子ども同士が交流しやすい場所を提供し、コミュニティの結びつきを促進。（親同士の交流は情報交換や相互サポートの機会）

専門知識の共有

専門家やボランティアが、子育てに関するワークショップやセミナーを提供し、保護者が子どもの健康や、発達に関する知識を身につける手助けをおこなう。

地域リソースの活用

地域の施設や資源を子育て支援に活用することで、子どもの多様な興味や能力を伸ばす場の提供。

多様なニーズへの対応

ハンデを持つ子どもや特別なニーズを持つ家族に対する支援を含め、地域内のさまざまな家庭のニーズに対応。



ご清聴いただき

ありがとうございました



岩城和志
ここ六年で変わらな
かったら
ワタシは諦める

SEE EL SEA SHINSHO

……2040年、私たちは「地域における支えあい」など言っていられない「経験したことがない環境」に身を置く。「支えあい」の放棄が消滅を迫られる中山間過疎地。その中山間過疎地で団塊世代の社会的課題に翻弄され続け、今もなお「若い衆」として地域課題を丸投げされる団塊世代たち。後の世代に課題を引き継がせたくないとする団塊世代の叫びがここにある。……

シーエルシー新書
000

私が思う2040年の姿

地域の支え合いと介護保険を題材にして

わたしのこと

1974（昭和49）年生まれ。父の帰郷により淡路島で育つ。進学後帰郷し、水道工員を経て、世紀末採用で一宮町社協に入局。2度の被災経験から土木型福祉活動専門員として育つ。その後、地域支えあいセンター長、生活困窮者自立支援事業主任相談員を経て、平成29年より主任生活支援コーディネーター（第1層）。平成30年より事務局次長。

他の業務は、計画活動、権利擁護、生活福祉資金等。長きに渡って担当した結果、社協随一の腹黒さが備わり、策士（影）との異名を持つが、策におぼれることも多い。

親ばかりで、恐妻家な49歳。社会福祉士、介護支援専門員、社会福祉実習指導者

【委員歴等（生活支援体制整備事業関連）】

兵庫県地域支援事業アドバイザー（R5）/兵庫県社協生活支援コーディネーターネットワーク企画委員会座長（R2～）/CLC生活支援コーディネーター養成研修講師（基本研修5）/生活支援体制整備検討会委員・県養成研修講師（兵庫県社協H28～H30）/宮城県被災者支援従事者研修、宮城県生活支援コーディネーター養成研修講師など



「救急車がやってくる」の例



倒れてる



気づく



救急車を呼ぶ



救急隊が来る

人(地域)の力・共助

制度(公の仕組み)

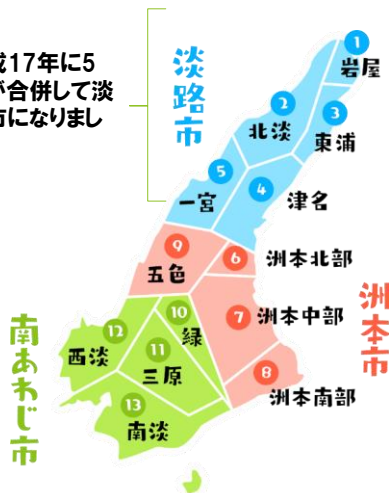
福祉で考えると…

① 地域福祉(予防的)

② 制度的福祉(対策・対処)

➡ だから地域づくり、まちづくり

平成17年に5
町が合併して淡
路市になりました



淡路市「市勢要覧」より

淡路市は淡路島の北部から中部に位置しています。東に大阪湾、西に播磨灘を臨み、総面積184.21平方キロメートルを有し、淡路島全体(595.64平方キロメートル)の約3割を占めます。また、本州と四国を結ぶ大動脈・神戸淡路鳴門自動車道が南北を貫通するほか、大阪湾沿いに国道28号、播磨灘沿岸に県道福良江井岩屋線、東西軸として県道北淡東浦線、県道津名一宮線などが各集落を結んでいます。

淡路市の地形については、旧津名・東浦町境の妙見山(標高522m)をはじめとして、地域の中央部を南北に貫く高原地帯が広がっていますが、西側はなだらかな斜面となっています。河川については、山間・丘陵地を源流に、まとまった流域を有する河川が少ないのが特徴で、その分、貯水用のため池が数多く見られます。

自然環境については非常に恵まれた地域であり、夏の海水浴シーズンには、京阪神をはじめ各地から多くの観光客が押し寄せます。

淡路市

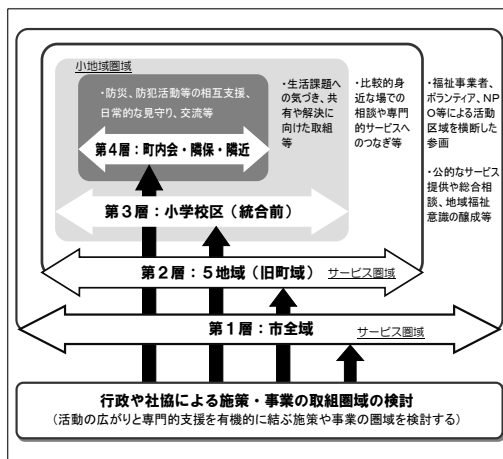


淡路市は5地域21地区

淡路市は旧町を単位とした5つの地域（ブロック）に行政の出先機関があり、21の地区、約250の町内会で構成されています。



5



地域圏域設定は4層

（第2期淡路市地域福祉計画にて設定）

淡路市は平成24年度に策定した淡路市第2期地域福祉計画において地域圏域の設定をおこなっています。

第3期地域福祉計画では、4層で圏域設定した上に、顔が見える生活圏域（3・4層）を「小地域圏域」と定め、住民主体の「小地域福祉活動」を進めます。

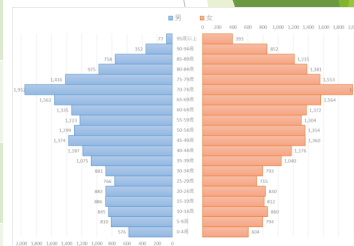
また、専門的な相談機能の整備をはじめ、保健・医療・福祉の連携によるサービスの体系的な提供や福祉意識を高めるための施策等は市全域や旧町域で取り組みます。これを「サービス提供圏域」と定め、連携等の活動を推進することになっています。（福祉サービス及び行政サービス）

6

18年前の私たち：今の私たち

淡路市全体 地域の人口動態（各年3月末 住民基本台帳より）過去18年人口増減（2005年→2023年）↓9,318人 ↓18.1%

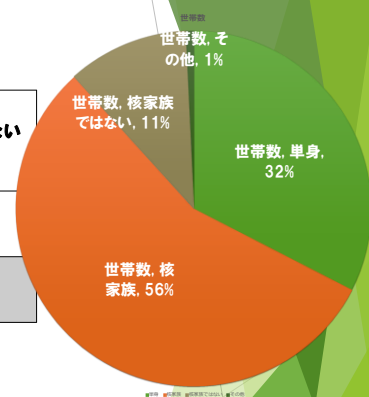
	2005年	2023年	人口	人数	率(%)
男	24,785	20,232	高齢者 (65以上)	16,036	38.0%
女	26,723	21,958	55歳以上	21,270	50.4%
計	51,508	42,190	生産年齢 (15～65)	21,665	51.4%
世帯数	19,040	19,975	年少人口 (0～14)	4,489	10.6%



7

淡路市の世帯構造（2022 国勢調査）

	総数	単身世帯	核家族世帯			核家族ではない世帯
			総数	夫婦のみ世帯	夫婦と子ども世帯	
世帯数	17,459	5,688	9,735	4,153	3,968	1,544
出現率		32.6%	55.8%	23.8%	22.7%	11%

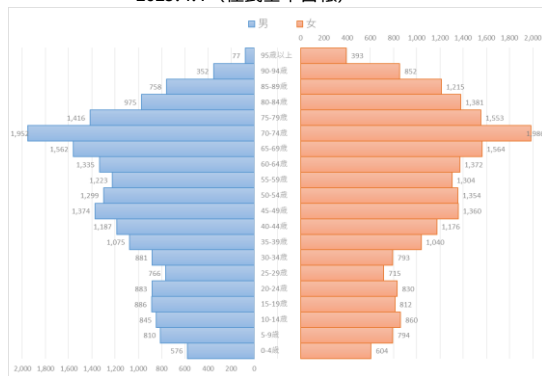


高齢者関連の世帯数(2022 国勢調査)

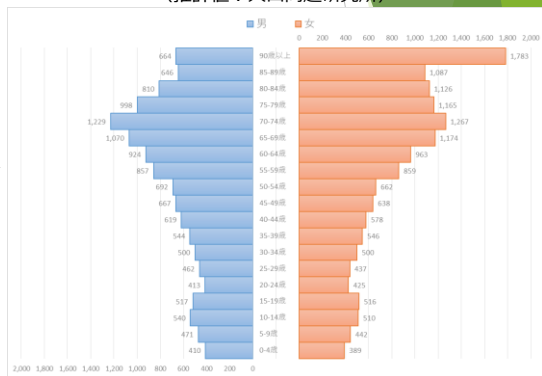
独居高齢者世帯数	3,142世帯（出現率18.0%）	三世代同居世帯数	1,119世帯（出現率6.4%）
高齢者夫婦世帯数	2,905世帯（出現率16.6%）		

8

淡路市全体の人口ピラミッド
2023.4.1（住民基本台帳）

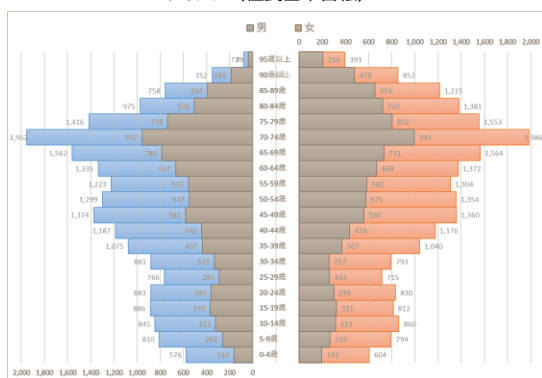


淡路市全体の人口ピラミッド 2040
（推計値：人口問題研究所）

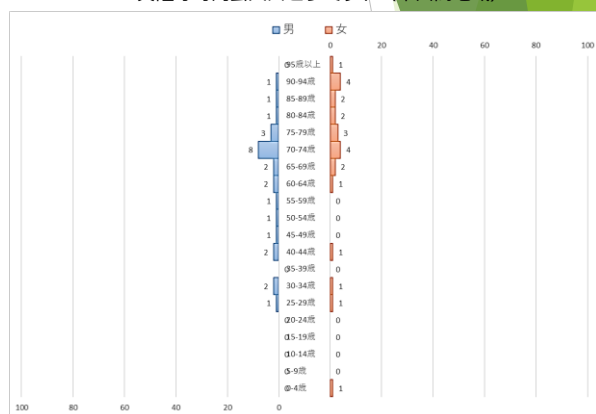


同じ市内においても市内移住が起きており、面積が50%超える過疎地での人口減少が顕著にみられる。

淡路市全体の人口ピラミッド
2023.4.1（住民基本台帳）



興隆寺町内会人口ピラミッド（中山間地域）



淡路市内旧過疎指定3区域の人口ピラミッド
2023.4.1（グレー）

合併の影響からか、自治体単位の人口構造では実態が見えにくくなっている。

私の怒りと嘆き（2040年に向けて）

ちゃんと話したらええやん

- ▶ 答えがわかってるぐらいなら話なんかせん
- ▶ 違いがなくて、考え方一緒なんやったら話なんかせん
- ▶ 権力性に押されて、追従するだけなんやったら話なんかせん
- ▶ 良い・悪いだけを区別するんやったら話なんかせん
- ▶ 自分らだけよかったらええんよなんやったら話なんかせん
- ▶ 所詮、何も変わらへんって考えるんやったら話なんかせん

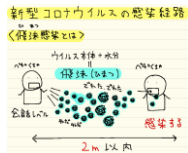
これまで、福祉と呼ばれること、ちゃんと話したか？

一部の人だけで、一部の世界で話してないか？

2040年の問題は、ちゃんと話をせなあかんのじゃないか

とはいえ、この関係性を分断する要因が たくさんあるんです。

分断する要因が…①新型コロナ



分断する要因が…②個人情報

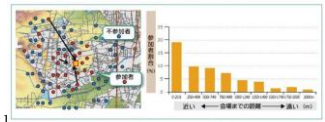
- ① 個人情報に触れて生活する
 - ② だれが困っているかわからない
 - ③ なにかしようともどこに…
- ※地域特有のアクセシビリティ（近づきやすさ）がない。

分断する要因 ③車社会

人があるこうとすると

- ① 280メートル
- ② 4分（3分～5分）

※ 車は点から点へ移動（ドアからドアへ）
路線バス（公共交通）のバス停は500m

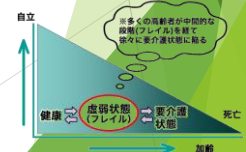


分断する要因が…④世帯人員の減少

- ① じいさん、ばあさん ② 配偶者、こども
- ③ 共働き、職場

※3世代で地域との関係づくりで重要だった「じいさん、ばあさん」は同居しておらず、共働きだと働き場での人との関係性だけに関係性が矮小化してしまう…

分断する要因が…⑤虚弱（フレイル）



分断する要因が…②個人情報

- ① 個人情報に触れて生活する
 - ② だれが困っているかわからない
 - ③ なにかしようともどこに…
- ※地域特有のアクセシビリティ（近づきやすさ）がない。

分断する要因が…④世帯人員の減少

- ① じいさん、ばあさん ② 配偶者、こども
- ③ 共働き、職場

※3世代で地域との関係づくりで重要だった「じいさん、ばあさん」は同居しておらず、共働きだと働き場での人との関係性だけに関係性が矮小化してしまう…

田舎の関係性の構築の仕方は

- ① 家（先祖代々）という縦の時間
- ② 同じ場所で過ごした（学校）という横軸
- ③ 職場・村の維持などの共同作業



- ① 家（先祖代々）という縦の時間 → 世帯員の減少でなんだかわからない
- ② 同じ場所で過ごした（学校）という横軸 → 統廃合でエリアが大きすぎる
- ③ 職場・村の維持などの共同作業 → 昔は…でごり押されても、もう限界

嘘くさい、実感できない言葉だけの 「支えあい」なんてものはなくなる

- ▶ 「支えあい」できる関係性や頼れる絶対量が少ない（人口減）
- ▶ 人が減って、80歳超えるまで仕事しているのに
- ▶ これまで言ってきた「ささえあい」は個人情報のやり取りがあった
- ▶ 関係性が作れない人はさらに孤立していく
- ▶ 何年、まちづくりするん？手入れもせんといて。
- ▶ 人が生活する視点じゃなく、「良い・悪い」の頭で考えた結果…
 - ▶ ちょっと我慢したり、許したり…それがあっての多様性やけど

サービスで、買ったらええやん

- ▶ それが社会をおかしくしてきたことがわからんのか！（若かりし頃）
- ▶ 期待値高すぎ。欲出し過ぎ。
- ▶ 関係性が薄まるとサービスは加速する
- ▶ サービスと経済的 集積があってこそ成立するもんやろ
- ▶ なかったらどうするん。使えなかったら・買えなかったらどうするん
- ▶ なんか、バランスが悪い。「ほどよく」とか「これぐらいで」とか

じゃあ、どう考えてるのか (福祉屋として・団塊ジュニアとして)

自分のまち・人を大事にしたいのよ

「福祉ゴミ箱」論を押し返す

- ▶ 人は、不都合なことはゴミじゃない
- ▶ リスクがあったらすぐ「福祉」 ⇒ そんなもん社会で分け持て
- ▶ 力が弱い・課題を抱える人 ⇒ 「福祉」じゃない「社会」
- ▶ 福祉に丸投げ ⇒ 都合の良いゴミ箱・掃き溜め
- ▶ ゴミ箱に入れたゴミを誰がもう一度手に取って見るの？
 - ▶ だから、ゴミじゃないと押し返す
- ▶ なんでこんなに立場弱い「福祉」 ⇒ 一番よく見えるやん社会が。

「介護保険を地域の福祉的エンジン」にしたい

- ▶ 平成18年から闇に葬られてもずっとそう思ってやってきた
- ▶ だから、生活支援コーディネーターになった
- ▶ 医療に関することは医療保険でコンセンサスを取るべき
- ▶ 介護保険は「強力なファンド」としての可能性に富んでいる
- ▶ しょうもない領域争いはもうやめにする（介護保険事業計画策定委員会）
- ▶ 計画策定は話し合いの場であり、コーディネーションの場
- ▶ 木を見て森を見ず・森を見て木を見ず ⇒ どっちも見んかい。
- ▶ 公とは何か（行政はそのものが公なので、しばしば立ち位置がズレる…）

「介護保険を地域の福祉的エンジン」にしたい②

- ▶ 介護保険は予防には失敗した（これ、政治がらみやったような…）
- ▶ 平成18年改正、27年改正の方向性は間違ってたけど…
 - ▶ 包括の孤立化と仕組みの不味さ
- ▶ 27年改正の説明の不味さがいまだに残っているから進まない
 - ▶ サービスづくりという貧相な言葉を使ったのがあかん
 - ▶ 当時の委員とちゃんと話したら「支えあい」に参加してほしいだけやった。
 - ▶ 結構楽しいのやでと言いたかっただけ。
- ▶ 予防の失敗を繰り返さないために「集まり・主体形成」を軸に私は抵抗してきた
 - ▶ 「したい」と「したい」が重なるところは必ずある。
 - ▶ 「したい」を引き出すために「お願い」がある

「介護保険を地域の福祉的エンジン」にしたい③

- ▶ 介護予防は「地域福祉（予防的福祉）」や「まちづくり（互助志向）」と相性がいい
 - ▶ 関係性を育むため、私は集まりを重視する
- ▶ 総合事業のそもそもは「多様な主体の参加とお金の流れ」
 - ▶ どうしてその時に「行為算定」を取り入れないのか。
 - ▶ 「時間算定」という介護保険の基礎構造が古すぎる（時間＋行為…タクシー料金）基礎構造改革や！：笑
 - ▶ だから、多様な主体の参画が促進されない。時間算定は能力の可否に直結してしまう（共生でない）
- ▶ 高齢に伴う障がいなんだから「障がい福祉」から学べばいい
 - ▶ すべては「社会参加」亡くなるその一瞬まで人は生きる。だったら生きることを支援すればいい
 - ▶ ケアは活動するための援助行為であって目的がおかしい。支援者の自己実現のための対象にしていないか
 - ▶ 介護保険サービスの決定的な失敗は社会参加の形態がないこと。障がいは「就労」という社会参加機能を持つ
- ▶ 国に言いたいことは「さっさと直せ」
 - ▶ いつまでも「みかん」を「アップル」と言いつづけるな。「アップル」は「りんご」なんや。
 - ▶ 「法を犯す」のではなく「法を超える」ことに魅力を感じてほしい
 - ▶ 人は環境があれば、真実を知れば必ず動く。その環境を整えてほしい

「結局のところ、私の2040年の姿」

- ▶ 私は、自分の地域で暮らす最後の切り札は「協同組合」だと思う
 - ▶ 田舎では「協同組合」のような組織が農業・漁業を中心に結構ある
 - ▶ もっと制度やお金を融通しあえたらいいと思う（中山間・地域強化事業）
- ▶ 地縁血縁⇒地縁社縁へ
 - ▶ ずっと働らかんとあかんわけやから「社縁」が大事になると思う。
 - ▶ 暮らしの領域にある社縁だったらもっとお互いに支えあえると思う。
 - ▶ 福祉の「6次産業化」（10年前に提案したら県に一蹴されましたけど）
- ▶ ケアは1対複数・小集団対大集団へ
 - ▶ 1対1のケアは限られた人へ 複数の方が予防効果が高いんやから複数を意識する
 - ▶ 小集団のケア力（お世話係・世話人さんとか）は貴重で大切（実践で学んだ）
 - ▶ 通所機能は拠点機能なので、そこに活路を見出している（ただいま実践中・たぶんいけると思う）
- ▶ 個人情報ダダ洩れ、「犯す」ことに厳しく「触れる」ことに寛大に
 - ▶ 地域は何でも知ってはいない。推測と拡散が不幸を招かないよう正確な情報を
 - ▶ 人に言えない、隠したいこともある。それはみんなで守る

個人的なことです…

- ▶ 私たちの世代でケリをつける
 - ▶ いけるところまでいって、あとは「知らん」でいい。
 - ▶ 次の世代がやりたい・できることだけ残していく。
 - ▶ その環境はがんばって作ってやりたい
- ▶ やっぱり「田舎人」
 - ▶ 愛着があるので捨てられない。
 - ▶ いろんな人が移り住んでくるとおもうけど、やっぱり意地みたいなのところもあるかな
 - ▶ 魂が帰っていく場所はたぶんここしかないのやと思う
- ▶ みんなで野垂れ死にますか
 - ▶ 私たちの世代が過ぎれば、少ないなりに人口のバランスは良くなると思う。
 - ▶ 過度な期待をせず、置かれた場所で花を咲かせて、散る世代なんですよ
(介護保険計画策定委員会で40代の委員が70代委員に言った言葉)

長々とすみません。
ご清聴ありがとうございました。

発言者:兵庫県:淡路市社会福祉協議会 岩城和志

「そろそろ2040年の話をしようか？ ～多世代での協働と持続可能な地域の姿とは～」
生活支援体制整備事業関係者向けオンラインフォーラム 2024.2.22

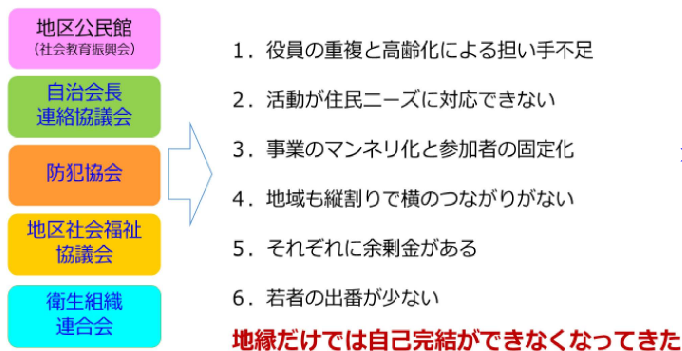
Session II

住民主体の地域づくりを住民主体で運営するために ～ 今、求められる地域の総合力とは～



特定非営利活動法人 きらりよしじまネットワーク
事務局長 高橋由和

形骸化していく吉島地区の各種団体の現状（2001）



地域づくりを統治する優良な主体を再構築する！

- ①住民が求める本当に必要なものを考える（Just in time）
 - ②地域や住民の「利益の最大化」を考える（Version up）
 - ③住民が持っている資源を地域に提供する仕組み（受益者負担）
- ↓
行政に依存しないで、住民の心の中にある愛郷心を育み、生活（暮らし）の課題を住民が自ら解決していく仕組みを創る



2001～2003	2004	2005	2006	2007
有志の勉強会 検討時期	組織再編提案 住民説明 住民WS	機構改革委員会 地区計画策定 住民説明 住民WS	機構改革案 地区計画案 住民説明 住民WS	機構改革案承認 地区計画案承認 定款案承認 法人格申請・認証

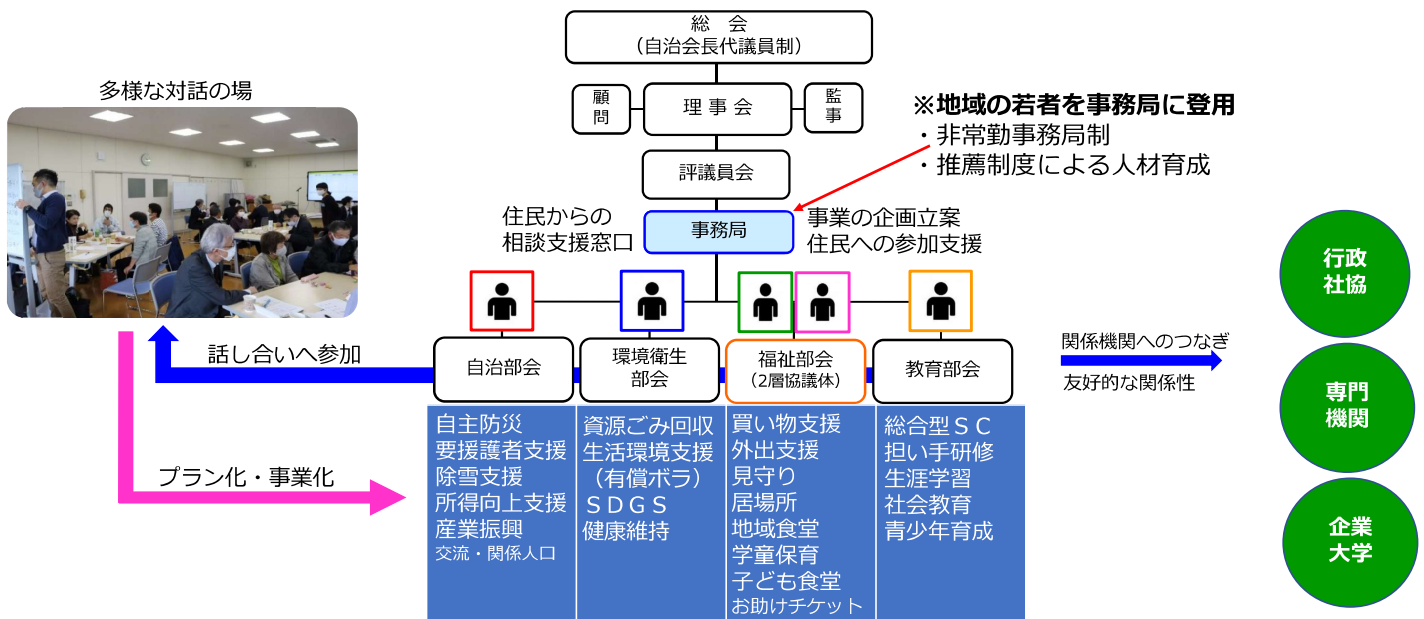
地域運営組織 Region Management Organization

地域の生活や暮らしを守るため、地域で暮らす人々が中心となって形成され、地域内の様々な関係主体が参加する協議組織が定めた地域経営の指針に基づき、地域課題の解決に向けた取組を持続的に実践する組織

- ・各団体の会計と組織を統合一元化
- ・将来を見据えた地域ビジョンの作成
- ・次世代の担い手育成を標準化
- ・地域づくりを持続可能なものにするために法人化で自立（自律）



住民の生活課題を重層的に解決する体制づくり（地域運営組織の形成）

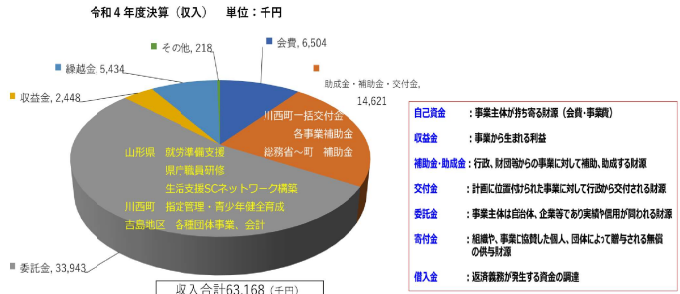


地域運営組織の形成と持続可能な地域づくりのプロセスデザイン



住民自ら地域の将来ビジョンを描き自らの責任で行動する

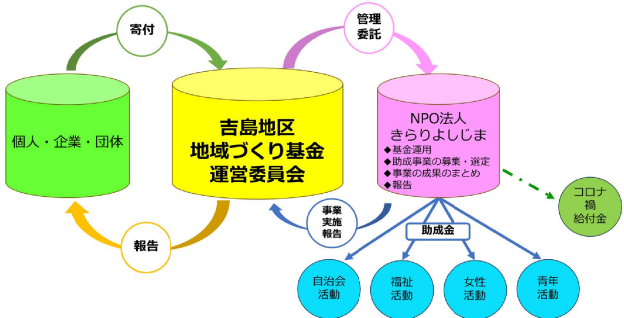
将来像	基本目標	分野別目標	施策の柱	行動領域	実施計画
きらりよししまの創造 人が輝き、喜びを見出し、笑顔と潤いのある里	明日へのつながり 歴史と文化を守り、人とひとが笑く	自治部会 誰もが住みたくる人にやさしいまちづくり	・住民参加による交流基盤の拡充 ・地域資源を活かした地域内協働による産業の活性化 ・住民の安全・安心の地域づくり	取り組む 内容と事業	
		環境衛生部会 自然にやさしい里づくり	・燃やさない、捨てないよししま ・環境にやさしいよししま ・健康の里よししま	取り組む 内容と事業	
		福祉部会 安心して暮らせる、つながりある吉島	・地域ぐるみの子育て支援 ・みんなが見出す生きがいづくり ・地域で暮らし続けるための生活支援	取り組む 内容	
		教育部会 みんなが生きがいを見出し楽しく学べる吉島	・地域リーダー育成と住民資質の向上 ・元気な心と体で生きがいを見出す生涯学習 ・地域教育力の向上	取り組む 内容	
		テーマ：夢をカタチに想い織りなすまちづくり			



資金確保の営業力を高める ⇒提案力（社会に一石を投じる）×実践力

多様な財源の情報提供と獲得するための学び（アイデアを企画する）の場の創出
申請作業（目的を定める）、報告作業（成果の見せ方）のレベルを上げる

地域づくり基金の創設



狭域（自治会）活動

- ①人口減少・超高齢化（人の空洞化）
- ②耕地面積の減少（土地の空洞化）
- ③共同作業や伝統行事の維持ができない
- ④生活や生産等のつながりの希薄
- ⑤地域に残る若者が地域に対する「誇り」の弱まり（誇りの空洞化）
- ⑥集落自体が減少し始めている（村の空洞化）

動けない人が出ている
時間のかかる人が出ている
支えるマンパワー不足

環境保全等が主となる
「守りの自治」

広域（地域運営組織）活動（公益性と収益性）

- ①多様な主体の連携・集合体
- ②明確な地域づくりの指針をもつ
- ③行政をはじめとする様々な主体との対等な協働
- ④地域の課題を解決する持続性のある組織

生活支援	介護予防	福祉移送	防災活動	居場所
子育て	環境保全	人材育成	移住定住	社会教育
地域運営組織（小さな役場）				
契約請負	行政委託	起業	商品開発	荒地利用
農都交流	特産販売	体験事業	観光交流	作業支援

地域の課題解決を実践する
「攻めの自治」を運営

補完

地域づくりを
持続可能なものにして
いくために

地域づくりに必要な柱

1. 合意形成

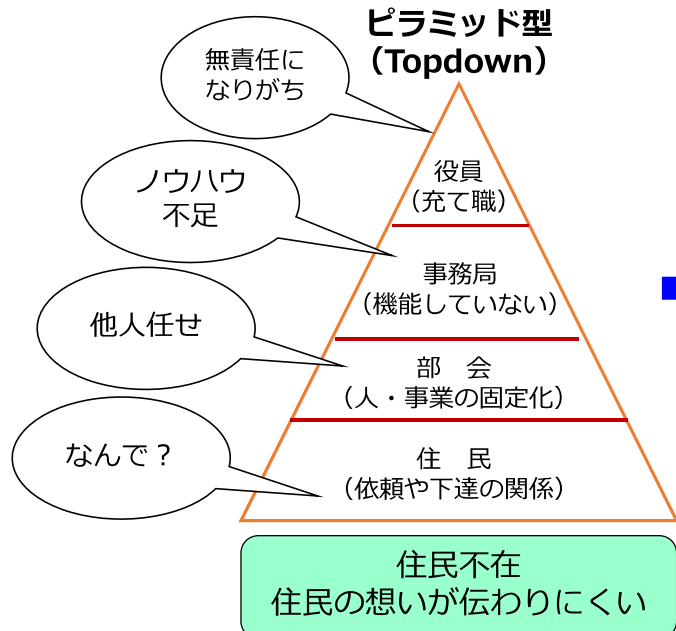
2. ひとづくり

3. 資金づくり

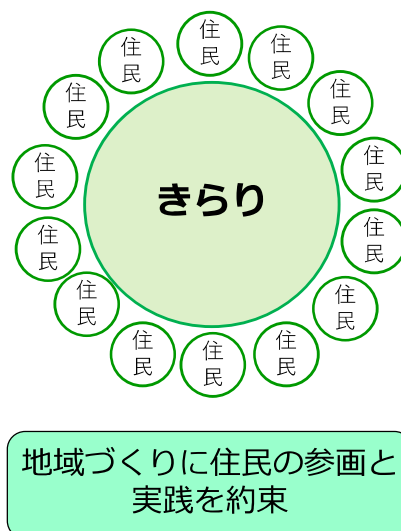
4. つながる

住民が地域づくりに安心して参加できる仕組み

ピラミッド型 (Topdown)



フラット＆ウェブ型 (bottomup)



民主的な合意形成の流れと住民参加

①住民WS・アンケート・各小委員会



住民の声を聴く

③理事会



事務局の提案を精査する場

②事務局会



課題集約・解析事業の企画立案

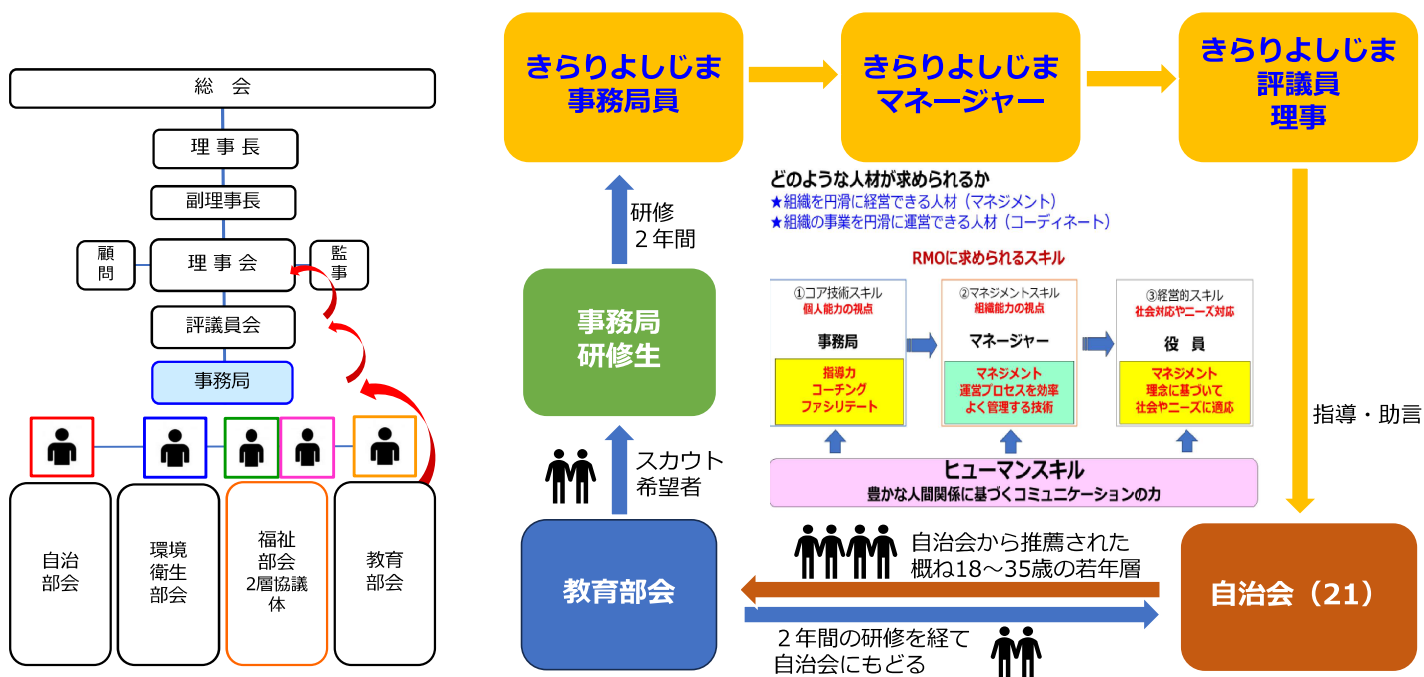
④総会



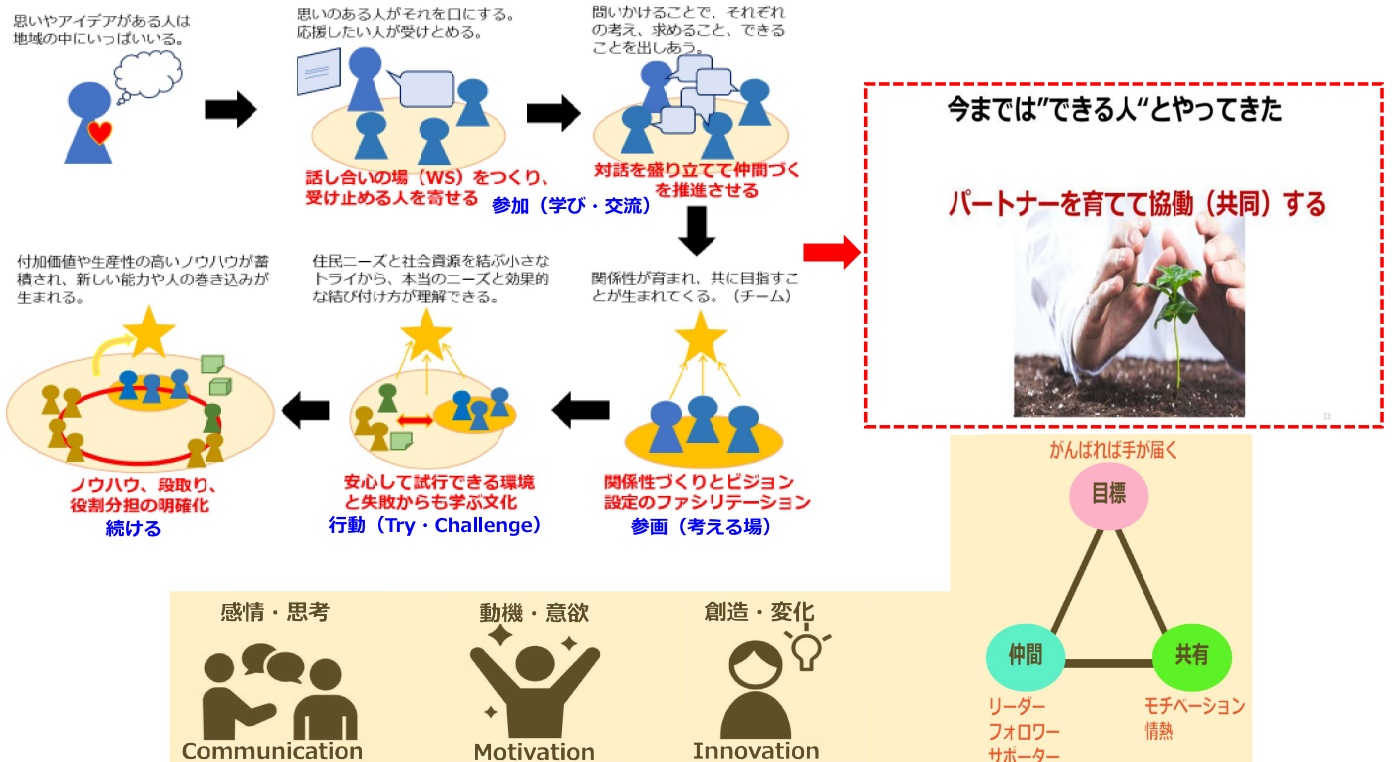
地域づくりのすべてを決議



人が生まれ（確保）育ち（育成）上手に世代交代



地域の中からの新しい人材確保と担い手発掘のプロセス

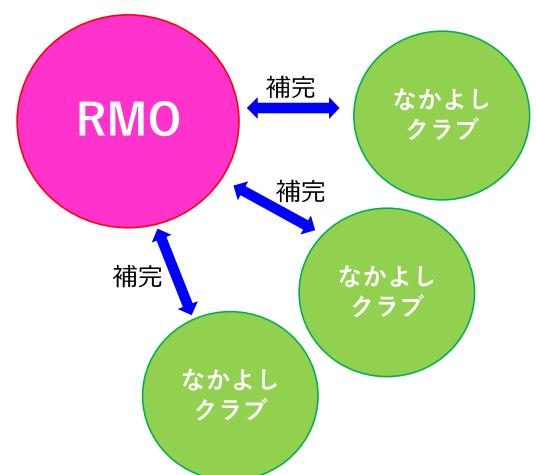


地域運営組織

組織の連帯意識 = 比較的高い
 使命感 = 公益
 組織の存続 = 継続・発展を考えている

なかよしクラブ（Team）

組織の連帯意識 = 比較的低い
 使命感 = 共益
 組織の存続 = いつでも休める・やめることができる



地域づくりの 人材育成に必要な 社会教育とは

●社会教育は、地域の人々の自己実現や社会参加に必要な知識や技能、態度を身につけることを支援する活動。

●地域づくりは、地域の課題を解決し、地域の魅力を高め、住民が安心して暮らせるようにするための取り組み。

●住民が地域づくりに取り組むことで、人材育成の場としての役割も果たす。

※例えば、地域の歴史や文化を学ぶ講座や、地域の課題を解決するためのワークショップなどの社会教育は、地域づくりを相互に補完しあう関係にある。

地域で重層的な助けあいや防災・減災の活動を展開していくためには・・・。

「地域を基盤とする包括的支援の在り方を考える場」

支援を必要とする層が自立した生活を実現できるように、地域ぐるみで支えていくあり方を考える場（生活課題の共感と助け合いの共有）

「地域課題の解決力」の強化を図る体制づくり

災害対応や生活支援や介護予防に関わる住民参加型の体制を整える。
（地域内ネットワークによる2層協議体・自主防災組織）

「地域丸ごとのつながり」

誰もが助けあいサービスの提供者になることが可能であり利用することが可能。
（ルールをつくりプラン化、事業化する）

「専門的人材の育成と活用」

専門的人材を育成する取り組みを活発化していく。
（生活支援コーディネーター、防災士、有償、無償のボランティア育成）

**吉島地区に
3人の防災士が誕生しました**

通日（1月25日、26日）には事前に普通救命講習
修了者として、防災士
養成研修講座を受講し
ていただいた3人の方が
見事に防災士の資格を取
得しました。

近頃、自然災害が多発
しています。山形県内、吉島地区
に於いても大きな被害を
受けたことから、防災や
減災の関心、取り組みを
強化していかうというこ
とで、吉島地区自主防災
組織連合会（会長・遠藤
昌司）の人材育成として
受講、取得していただき
ました。

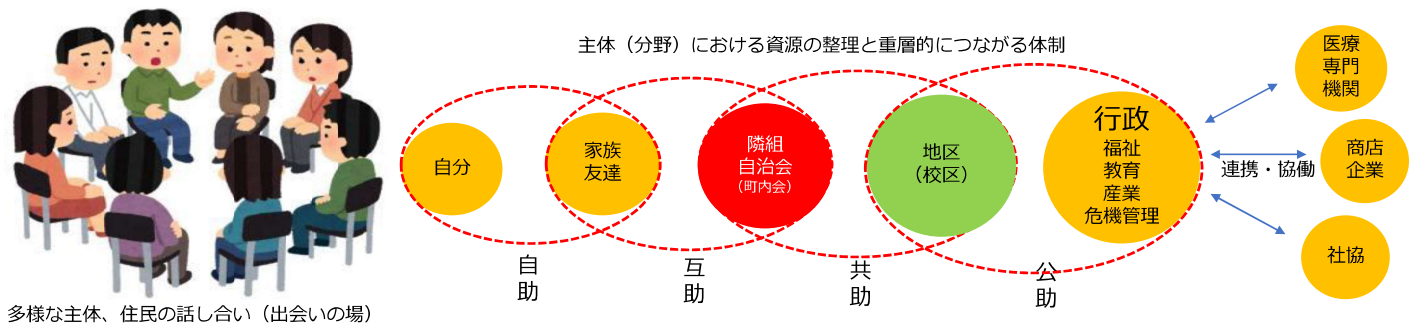
今後、地域の防災研修
【防災士とは】
地域の中で災害への備
えや対応を図るための専
門的の資格を取得し、防
災活動を支えるための知
識と技術を習得した人の
ことです。

前藤千映さん（前藤さん）

佐藤大さん（佐藤さん）

秋山美沙希さん（秋山さん）

主体（分野）における資源の整理と重層的につながる体制



有事に備える訓練



事業化

資源開発

- ・地域に不足するサービスの創出
- ・サービスの担い手の養成
- ・元気な高齢者などが担い手として活動する場の確保 など

ネットワーク構築

- ・関係者間の情報共有
- ・サービス提供主体間の連携体制づくり など

ニーズと取組のマッチング

- ・地域の支援ニーズとサービス提供主体の活動をマッチング など

ルールづくり・プラン化

15

ひろがり広がる可能性

交流の多様化による関係人口の拡充

新しい人の流れと地域のつながりの創出（第二のふるさとと思える支援、協力してくれる人や地域）
地域再生源流 きらりへ集まれ！



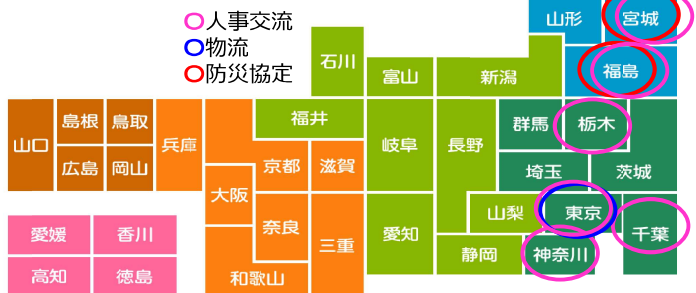
人 ⇒ SNS（よりオープンに、協力しやすく）

モノ ⇒ シェア（カーシェア、シェアオフィス、シェアハウス）

お金 ⇒ より集めやすく（クラウドファンディング）

情報 ⇒ より自由に、より速く、より美しく

- 人事交流
- 物流
- 防災協定



住民マッチングの地域包括ケアの構築

地域

地方創生
持続可能なまちづくり
(まち・ひと・しごと)



地域共生
わがこと
まるごと



**住み慣れた地域の中で
单身でも病気をしても
安心して暮らせる社会**

定住人口は確実に
減少する！

超高齢社会はますます
加速する！

動けない人が増えてくる

時間がかかる人が増えてくる

支えるマンパワーが
不足してくる

自治体の財政は悪化する！

パートナーシップ (対等をkeep)



分野横断の行政施策と
地域の多様な主体との連携や
強い協働が求められている

市内マッチングの創生と共生のまちづくり

行政

背景

人口減少
東京一極集中の是正

課題
目指すもの

まち・ひと・しごと
の創生

自治体の
役割

地方人口ビジョン
地方版総合戦略策定



縦割の公的制度の限界
地域のつながりの再構築

地域の課題解決
わがこと・丸ごとの
地域づくり

生活支援体制整備
SCの配置

持続可能な地域づくりのポイント

- 1 住民ニーズと合意形成を重視して地域づくりのビジョンを共有。
- 2 地域づくりに経営ノウハウを取り入れる。
- 3 人材育成の仕組みがあり、特定のリーダーに過度の依存をしない。
- 4 若者の役割を重視しつつも、他の年齢層にも学びと役割、生きがいを設定する。
- 5 小さいながらも地域の経済活動が生みだされている。
- 6 住民同士の話合いの中から生まれたアイデアを活かして、生活に根ざした事業を展開する。
- 7 事業だけでは全てを補完できないため地域外からも人材や資源を積極的に受け入れ活動のつながりと拡がりをつくる。



ご清聴いただき

ありがとうございました

厚生労働省 令和 5 年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業

**「変化していく高齢者像を見据えた地域住民が支え合う地域づくり推進のための生活支援
コーディネーターに求められる機能に関する調査研究」報告書**

発 行 日 令和 6 年 3 月 29 日

編・発行 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1F

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

<http://www.clc-japan.com/>
